

平成 20 年度卒業論文

旭川市に於ける繁華街に関する研究

北海道教育大学旭川校

生涯教育課程コミュニティ計画コース社会学ゼミ

学生番号 5403

磯野 彩子

目次

1 さんろく街とは

1-1 さんろく街の概要

1-2 さんろくの場所

1-3 さんろくの歴史

1-4 さんろくイベント

1-4-1 さんろくまつり

1-4-2 その他

1-5 昼間のさんろく

2 さんろくと時代的变化

2-1 日本経済とさんろく

2-2 旭川市の人口変遷

2-3 郊外店の進出（聞き取りのやつ）

2-3-1 駅周辺

2-3-2 大学周辺

2-3-3 地域の居酒屋

2-3-4 大型チェーン店

2-4 酒の変化

3 さんろくの人

3-1 地元の人

3-1-1 店の人

3-1-2 客

3-2 観光客

3-2-1 旭山動物園の影響

3-2-1-1 日本人観光客

3-2-1-2 外国人観光客

4 まとめ

4-1 なぜさんろくが衰退したか

4-2 今後のさんろく像

【参考文献・HP】

1 さんろく街とは

1-1 さんろく街の概要

さんろく街とは、北海道旭川市のほぼ中心地にある歓楽街のことで、今現在でも約 1000 軒もの飲食店がひしめく「北のネオン街」である。

名称は、「三・六街」「さんろく街」「サンロク街」など様々な表記がされている。地元住民の間では、単純に「さんろく」とも呼ばれることが多く、旭川市民なら誰でも知っている合い言葉である。旭川市民の間では、「飲みに行く＝さんろく」というイメージが強く、「今日、どこにのみに行く？」といった会話のなかでは、必ずと言っていいほど「さんろく街」は候補に含まれている。また、すすきの・歌舞伎町・中洲など全国有数の歓楽街に比べると規模は小さいながらも、道北最大級の盛り場である。

名称の由来としては、飲食街などの店の多くが3条通り6丁目に多いからと言うことで、「3・6」＝「さんろく」というものが最も有力な説であるが、また別に旭川が「大雪山の山麓にある」ことから「さんろく街」と言う説もある。どれが正しいというはっきりした答えは定かではない。

そして、さんろくは、旭川の実り豊かな農作物と新鮮な海の幸に恵まれている。

それは、「旭一」と言った大きな市場があることや、旭川市が北海道のほぼ中心部に位置し、日本海・太平洋・オホーツク海からほぼ等距離にあり、三つの海から新鮮な海の幸が集まることなど、地理的・交通条件等々に恵まれ流通機能が大きく発展していったことが要因と言える。市場が、海のない旭川に漁港や魚河岸のような活況を見せ、新鮮な魚介類をさんろくへ提供している。同時に旭川市をはじめ道北地域は、国内でも有数の米・青果物の産地である。米に関しては、旭川の夏は日中は暑く夜間は冷え、寒暖の差が味を引き締めているのである。そうした四季折々の旬の新鮮野菜や果物が大量に集まるのだ。まさに「旭川は北海道の食の中心地」と言っても過言ではない。

また「旭川は札幌の半値、東京の4分の1で食材が手に入る」と言われ、これは、旭川が札幌や東京などの大都市圏に比べると給与水準が低いので物価水準も同時に低くなるからである。そのほかにも、中卸を設けず直接食材を買い受ける店もあり、中間コストをかけずに入荷するため、安価で食材を仕入れることができるのだ。近年、こういった流通ルートから、様々な新鮮な食材をさんろくでは仕入れており、「創作〇〇」という店が増えてきているが、和洋折衷にこだわらず、独自の味を提供する店が増加している。そんな、市場のためか新鮮な食品がダイレクトに仕入れられるのでコストがかからず、飲食店では「やすくてうまいもの」が食べれる。また、旭川には大雪山の湧き水や、市内を流れる一級河川などの綺麗な水にも恵まれており、さんろくには欠かせない「うまい酒」を製造している工場も多い。これらの条件から、さんろく街は「食」に恵まれているのである。

旭川は、最盛期に十九の酒蔵を抱えていた「酒のまち」でもあり、知る人ぞ知る「カクテルの街」でもあり、日本バーテンダー協会会長やカクテル作り世界一など、カクテル界に風雲児を送り出している。4・3 仲通りを「カクテルロード」と言うように、さんろくにあるカクテルバーは、生活様式の西洋化に伴い洋酒ブームが起き、それに後押しされながら発展を遂げた。そして、著名なバーテンダーを育て上げ、「カクテルの街・旭川」として全国的にも知名度を上げた。カクテル好きに「旭川」と言えば、「カクテル」と答えるほど

有名で、全国に名を馳せた老舗バーや、オリジナルカクテルがさんろくにはある。

やはり、札幌など大都市圏と比較すると、ぼったくり被害や暴力事件なども少なく「安全な飲み屋街」「道北最大の歓楽街」として全国的に有名である。

【写真 1-1 数年前のさんろく街（昭和通り）】



出典：「ウィキペディア」

1-2 さんろくの場所

先にも述べたように、旭川市の中心部・3条通6丁目を中心とする一帯に歓楽街が多く、それらを指して「さんろく街」と呼ばれている。しかし、その場所の明確な区切りははっきりしておらず、人によって3条通りの6丁目のみと言う人もいれば、2条の仲通り、4条通り、または5条7丁目のふらり〜とあたりも含むと考えている人もいる。

さんろく街は、年代やよく利用する店などによって範囲が広くもなり狭くもなる場所であり、その感覚は人それぞれバラバラである。しかし、旭川市民の中では「さんろく」といえば、3条通6丁目を指すのは確かである。

また、さんろく街の昭和通りを「ウェルカムロード」とし、活性化を期待して2・3仲通りを「ビクトリーロード」、3条本通りを天使が出会いを取り持つようにと「エンジェルロード」、ショットバーが集まるので3・4仲通りを「カクテルロード」とした。正直これらの名称は、地元住民には馴染んでおらず、旭川観光社交組合が名づけたもので、これから出版物に露出していく、街角案内プレートなどで名称を普及していく予定である。

それに加えて、さんろくには97年から「ツインピラー」という、シンボルタワーが設置された。これは、札幌すすきののニッカウィスキーの大きな看板がある様に、「旭川の繁華街はここにある！」というアピールを兼ね、「旭川のさんろくにもシンボルを！」という要望で建てられた。昭和通りの中央分離帯に男性を表すグリーンのネオンと、女性を表すオレンジネオンの二基のタワーである。高さは11m50cmもあり、迫力のあるタワーである。そして愛称を市民公募し「ツインピラー」と「オリ・ヒコ物語」を組み合わせた「ツインピラー3・6 オリ・ヒコ物語」に正式名称を決定した。電気の交換などの管理は市が行っており、市民や組合の強い要望でさんろくのシンボルが出来上がった。

そして、さんろくには忘れてはいけない「小路」が沢山ある。そのひとつが「すずらん小路」である。59年に、3条6丁目本通に面して、屋根のある珍しい飲食店小路が建てら

れた。かつては道の両側に木造二階立ての店舗兼住宅が 10 数戸あり、二階が生活の場、一階が店舗で賑わっていたそうだ。71 年に「すずらん小路」として生まれ変わり、現在でも寿司屋、スナック、居酒屋など夜の明るい小路はネオンに照らされて 10 数店が営業し、昼間もカラオケ喫茶・定食屋として昼間なのに屋根付きなため、小路自体は真っ暗なのだが、今も元気に店を連ねている。

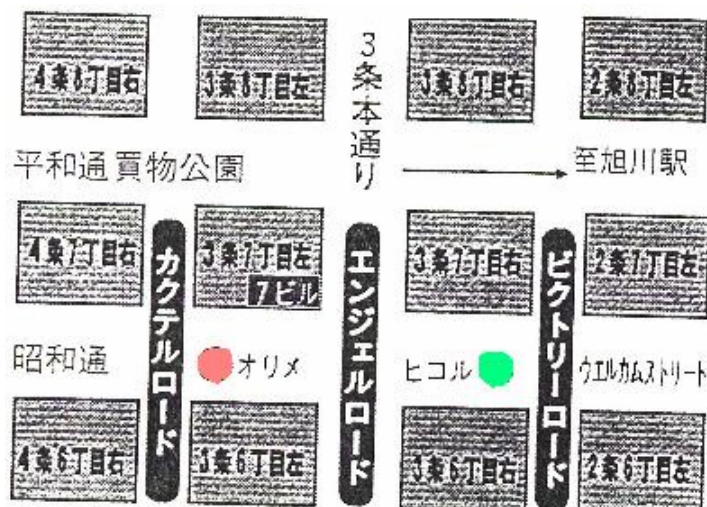
【写真 1-2 夜と昼間のすずらん小路】



【筆者撮影】

そのほかにも、「名もない小路」と呼ばれる小路がある。午後九時過ぎに居酒屋で腹ごしらえを終えて軽く飲んだ人々が、二次会や次の店を探して小路をあるくことが多い。大きな飲食店ビルの片隅の飲食店小路が、さんろくの穴場でもあり、魅力的な店が沢山ある。他にも「ナイトタウン」、「パリ街」、「5・7 小路ふらりーと」などがある。こういった小路が数多くあるのも、さんろくの面白みであり、その小路から自分好みの店を探し歩くと言うのも楽しみのひとつである。

【図 1-1 さんろく街の通りの愛称】



出典：「北海道経済」

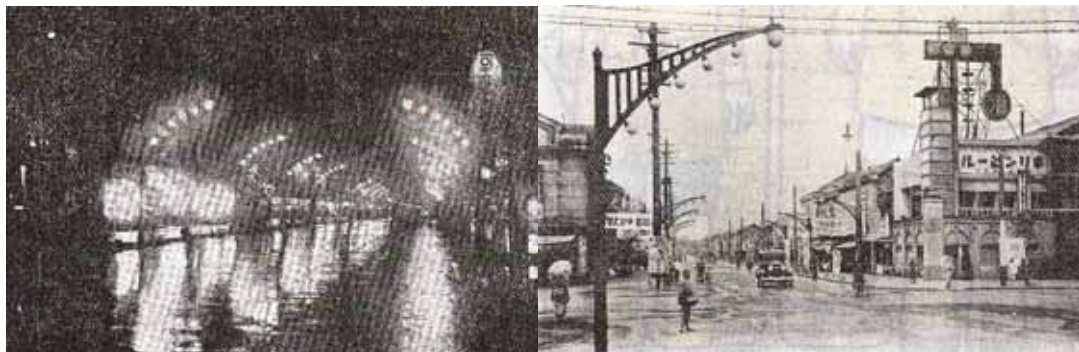
1-3 さんろくの歴史

旭川は交通・流通の中心であり、上川の要所として発展してきた。そして、「軍都」としても栄えてきた。昔は、旧七師団として軍隊が置かれ、その後 62 年師団改編により、現在の第 2 師団司令部所在駐屯地となり、今でも多くの自衛隊員が旭川にすんでいる。

当時は軍の出入りが多かったため、将校や軍の御用商人たちを相手にした高級料亭が多かった。また、料理の味も質も高かった。料理向けの「^{けんぼん}見番」という置屋があり、お座敷がかった芸者たちが町をいきかい、多くの軍人さんたちが遊んでいた。

そして、この界限に名前がついたのは 60 年代に入ってからのもので、新聞が「三・六街」の表現を使ったのは、67 年 12 月のことである。旭川市史編集会議編集委員で旭川工業高専名誉教授の木村光夫氏＝山形市在住「この頃には呼び名として定着していたと思う。それ以前 62～64 年ごろにさんろく街という名称が誕生していたのでは？」と話す。

【写真 1-3 戦後まもない昭和通り】



出典：「開基 100 年記念誌・目で見える旭川の歩み」

55 年に「庶民の集う飲み屋にしよう！！」ということで、吉田松之助が現在の 4 条 6 丁目付近に札幌の狸小路にあやかり「狸小路」と名づけられた 5,6 軒の集合店舗を作ったことが始まりと言われ、そこではおでんや焼き鳥など酒の肴を扱う店が多くお客さんをもてなしたといわれており、それがさんろくの発祥という見解がなされている。「芸者遊び」は、庶民には縁遠かったが、旭川の「狸小路」は繁盛しており、全国的にも「トリスバー」「ニッカバー」と言った洋酒バーが広がり、旭川の庶民にも洋酒ブームが広がった。また、キャバレーやクラブも次々と開店し、客の中心は羽振りの良い木材・土建業・官公庁関係で、旭川だけではなく道内から集まっていた。このように、職に就いた若者にはさんろくは「高根の花」のような存在であった。

当時は、バンド演奏や、地方周りの演歌歌手が歌い、時にはヌードショーもあり、キャバレーの明朗会計制度を取り入れてから、大衆化が進みさらに客が増えたと言われる。10 年後の 65 年前後から、3 条 6 丁目付近に飲食街が急速に増えだした。新たな営業スペースを求めるため、このころから、横にひしめき合う店舗は、新たな場所を求め上へ上へと移動し始め、高層の飲食ビルが建ちだした。また 3 条 6 丁目だけではなく、7 丁目、5 丁目、2 条、4 条と 3 条 6 丁目を中心にどんどん飲食・歓楽街として発展していった。こ

うしたビルへの移転や一儲けした店の閉店により、それまで人気だった「狸小路」から客足が減り、約 10 年後 70 年代中盤で松之助氏の建物は役目を終えるように、姿を消して更地になった。

飲食店急増は、65 年前後からの飲食店ビルの建設ラッシュを促した。64 年 12 月、3・6 街初の地上 4 階建て地下一階の飲食店ビル「今井ビル」開業を皮切りに、77 年に「セブンビル」(3 の 7) が開業、巨大ビル群は人の流れ・店の集積などまちの様相を変えた。こうして、大型テナントビルがぞくぞくと建設され、ネオン看板が並び様々な店舗が軒を連ねるようになり、さんろく街は高度経済成長とともに発展していくことになった。

時代が経つにつれて、飲み屋の数・種類が増え、客側が自由に店を選べる時代になり、さらに日本の高度経済成長期とともに膨張してきたさんろく街は、73 年のオイルショックも乗り越えて、数年後に活況期を迎える。さらに、旭川市の好条件や景気の良さが味方し 80 年代～90 年代前半のバブル期の頃に全盛期を迎える。

日本経済が飛躍的に成長を遂げたのは 55 年から 73 年の 18 年間である。消費の過熱は盛り場にも影響し、これらの盛り場では大金を手にした「バブル紳士」「ボディコンギャル」から学生までが夜遊びに大金をつぎ込んだ。この様な動きを受け、大手企業から中小の不動産会社までがディスコなどのナイトレジャー開発にも投資したこともあり、80 年代後半から 90 年代初頭にかけて雑居ビルや、ディスコ、飲食店が乱立し、その多くが盛況になるなど、一大ディスコ・ブームが日本全国で起こり、さんろくでも同様に盛り上がった。

飲食店ビルは盛り場には欠かせない存在であり、多種多様な店が軒を連ねる。73 年に 800 軒だった飲食店は、93 年には 1300 軒を超えた。この間、さんろく街の飲食店ビルの出店形態が変わり、80 年ごろから、テーブルや椅子、カラオケなどの設備ごとを貸すリース店舗が主流になった。昔からの経営者は、「昔みたいに権利金で大金を現金は必要ないので、家賃が下がった」と言う。従来は、店を構えるまでに、店舗の権利を買い、内装を施すまで費用がかかったにも関わらず、リース店舗だと手持ち資金がなくても 1～200 万から、スナックを開店できるということもあり、気軽に出店する経営者が増えた。

昔からの経営者は、それなりにお金がかかった分、店を開くにはそれなりの決心が必要で頑張らなければならないという気持ちもあったのだが、リースになってからは、商売への思い入れも薄れているのかもという。経営者の商売に対する「質」も微妙に変化した。

90 年初頭のバブル崩壊の荒波が押し寄せて以来、さんろくは厳しくなっている。不景気が浸透してしまい、我慢していたところが閉店するケースが増えてきている。不景気での郊外への飲食店の拡散で、さんろくの空洞化が進み閑散としている。

1-4 さんろくのイベント

1-4-1 さんろくまつり

旭川の夏を彩る夏まつりとして道新納涼花火大会を皮切りに「大雪さんろくまつり」として、毎年 8 月第一週木・金・土の三日間行なわれているまつりである。80 年 9 月に第一回大雪さんろくまつりとして行なわれた。

80 年 9 月 20 日の土曜日のさんろく街の中心、3 条 6 丁目の本通に特設ステージが設け

られ、周辺の通りや歩道に約 700 の提灯がぶら下がった。そして午後三時に「第一回さんろくまつり」が開会が宣言された！キャバレー・クラブのホステスやバーテンダー・ボーイら約 260 名が参加した。「カーニバルパレード」の樽神輿がにぎやかに中心街を練り歩く。特設ステージではバンド演奏や歌謡ショー、酒の早飲み競争、カラオケ合戦などを行い、周囲に焼き鳥、おでんの屋台が 20 近く並んだ。翌日 21 日日曜日までの二日間で夜遅くまで盛り上がり、80 年はキャバレーやクラブが全盛時代と同時に、旭川開庁 90 周年を迎えることもあり「さんろく街を舞台に観光まつりを」という機運が、二年ほど前の 78 年から盛り上がりを見せていた。当時の観光協会常務の稲村健蔵氏は「8 月の夏まつりが終わると、客足が止まってしまう。それで人を呼べる行事をとということで、こうなった。」と言う。第一回目の実行委員長を務めた、永井与作氏は「最初の年は、資金がなかったため、『奉加帳』を持ってさんろく街の店を一軒一軒回って寄付をお願いした。しかし、なかなか集まらなかった。だが、最終的には 270 件、300 万円あまり集まった。」と振り返る。

さんろく街初の大々的なイベントと言うことで、多くの人を訪れ地元酒造が振舞った酒を片手に夜遅くまでまつりを堪能した。

翌 81 年、さんろくまつりは不況で業界の活力がなく、「今年は中止にする」という方針を実行委員は提示した。第一回目の実行委員長を務めた、永井与作氏は引きつづき二回目の委員長を務め中止を阻止した。その後、九月開催では寒いと言う意見から第三回から 8 月に早め、4 回目はまつりの規模拡大を狙い日程を盛夏の「旭川夏まつり」と日時を重ねた。

現在に至るこのまつりは、第四回目 84 年から規模拡大を狙い「旭川夏まつり」と同時開催で、三日間にわたり繰り広げられている。近年では、場所は 2～4 条 5～7 丁目通・縦通で特設ステージは 3 条 5 丁目本通交差点に構えており、主催は「北海道社交飲食生活衛生同業組合旭川地区本部」の「大雪さんろくまつり実行委員会」である。「大雪さんろくまつり」と、「さんろく」とひらがなで表記するのは、「大雪山のさんろくに広がる旭川の繁華街のまつり」すなわち「山麓のまつり」という意味がこめられており、3 条 6 丁目以外の店舗もあるので、数字ではなくひらがな表記になっている。今は 7 月下旬から 8 月下旬に開催されているが、始まった当初は秋口の 9 月ごろ開催していた。現在では、旭川名物のラーメンを気軽に食べ比べることのできる「ラーメンフェスティバル」や、全国でも珍しい女性たちが上川神社に赴き天照大神のお札を納めた神輿を担ぐ「女みこし華酔会」、そのほか独自の仕掛けや工夫を凝らし続ける「大雪山麓まつり」は「旭川夏まつり」のひとつとして毎年盛り上がり、一年間で一番さんろくが熱くなる三日間である。

また、それ自体が「旭川の夏の顔」である。木・金・土の三日間に設定されているのは、木曜日は旭橋の河川敷で花火大会が毎年あり、そこで街に出てきたみなさんに、そのままさんろくで一杯飲んで貰おうということで、前夜祭として木曜日を設けた。そして、金・土曜日と仕事が終わって休みを利用し、さんろくを満喫していただくということで、この曜日設定になっている。「日曜日もまつりをやるべきでは？」という声もあるが、最終日（土曜日）は、翌朝 5 時までテントを片付けたりゴミを拾ったりで、日曜日まで祭りを行なってしまうと、次の月曜日の営業が体調的にもつらくなってしまうので、さんろくには休息日が必要なのである。

【表 1-1 主なプログラム】	
一日目(木)18:00～	開会式・道新納涼花火大会
二日目(金)14:00～21:30	歌謡ショー・市民舞踏パレード YOSAKOI ソーランナイト・ディスコナイト
三日目(土)16:30～22:00	大雪連合神輿・烈夏七夕まつり



以前、さんろく街に神社を置く予定があったのだが適当な場所がなく断念し、その頃次第にまつり自体のマンネリ化を指摘する声が出た。しかし、ある来客者に、「このおまつりには『御神体』はないの？」と尋ねられた。91年旭川夏まつりのみこし行列「大雪連合神輿」が前年から交通規制で車両止めになっていた、昭和通りを抜けてまつり会場を通りようになった。「神輿の登場がさんろくまつりに動きを加えた」と、当時の旭川商工会議所事務局長の佐藤和明氏は言う。更に 94 年に「ダンヒル」の奈良岡晴美さんの発起でさんろくで働く女性たちが、買い物公園に眠っていた神輿を担ぐ企画を行ない当初一回限りだったのが見物客に大好評だったため、翌 95 年に「^{かすい}華酔会」として神輿を担ぐ女性グループが形成された。97 年には宮大工により女神輿が完成し、上川神社に赴き神輿の中に天照大神のお札を納めた。こうして、女神輿は御神体となり名実ともにさんろくまつりは「本当のまつり」になった。そのほかにも、同時開催の旭川夏まつりの一環である「烈火七夕まつり」では、昭和通りの交通規制を行い太鼓や山車のパレードが見られる。

そして、旭川観光社交組合長の山崎博幸氏は人気が全国区になっていた「旭川ラーメン」

に着目し、市内のラーメン店主の協力で 97 年に「ラーメンフェスティバル」が始まった。毎年 15 前後のラーメン店が軒を連ね、お客さんには「旭川の名物が気軽に食べ比べられる」と予想以上に好評だった。1000 円でハーフサイズのラーメンを 3 杯食べられる食券を販売し、主催側としても食券の販売やラーメン店出店料などの資金源になり、ラーメン店も宣伝になると好評である。

【資料 1-2

ラーメンフェスティバルチケット】



【さんろく祭りチケット・08 年度版】

【写真 1-4

ラーメンフェスティバルの盛況ぶり】



【旭川さんろく物語】

実行委員らの積極的活動により、当初旭川夏祭りの一環だったものが、「旭川の夏の顔」に成長し、道北の歓楽街からはじまったまつりはすっかり地元に根付いていた。夏まつりと日程を重ね、どんどん賑わいを増し 4 回目から 21 回目まで会長を務めた今井正氏は、まつりを盛り上げるとともに、「仲間と手作りのアイデアを提案し、人寄せのイベントに終わらせたくない」と言う。来場者も 2004 年は夏祭りは夏祭りを合わせ 95 年の約 2 倍の 49 万 5 千人に上った。人口の約 1.4 倍の人が集まった。平日は街を歩く人はまばらであるが、まつりのときは客と客との肩がぶつかるほど活気付き、集客力では申し分ないさんろくまつりに新たな課題も生まれた。これから全国区にと期待高まるまつりであり、今ではさんろく街が一番盛り上がるイベントとなっている。屋外の屋台では、お客さんはお店に入らなくても露天でおすすめの 1 品を食べられるチャンスでありビール片手におつまみ探しもできる。また、店側は新規開拓になると盛り上がりを見せていたのだが、決して「さんろく街を全体を挙げて」と言う雰囲気ではなく、みんながみんな喜んでいるわけではない。不満の声も聞こえてきた。「客がまつりにばかり行って店に来なくなる」、「売り上げにつながらない」と言う反発の声をもらす経営者も少なくない。酒や焼き鳥などを売る屋台に期間中は客が立ち寄り、ビル内のある店舗主は、「屋外露店に出店しているクラブに客を取られる」という。実際にまつり期間中は、その屋台を出すクラブやスナックに流れていく。屋外の屋台やまつりに携わっていない経営者は客を取られると嘆く人が多い。こうした実情にある関係者は「まつりのせいで客がこなくなるというのは、経営努力をしていないことだ」と厳しい言葉を浴びせ、まつりの集客力を生かしていかに多くの客を集めるか、

呼び込めるかをまつりが大きくなった今、経営者の手腕が試されている。主催組合側も、「まつりでお客さんがきていることをチャンスととらえ、まつりの時期に店独自のイベントを行うなど、企業努力をしてほしい」と言う。お客を待っているのではなく、自ら呼び込む努力をする時代になってきた。また、経営者同士の交流をし互いに店を紹介し合うなど、集客にも力を入れていることが伺える。また、まつりの原動力である資金集めにおいては、協力をしていただける飲食店からなどから集まる資金源は 2000 年代前半では横ばいの 120 万円程度で、関係者は「現状では、今後も協賛金が増えるのは難しい」と打ち明ける。夏の一大イベントに寄せる期待は大きい。旭川市は、市内で開催される各夏まつりに支出される助成金として 05 年度の総額は 1475 万円を計上した。市内の夏まつりに振り分けられる助成金のうち、さんろくまつりには 4000 万円分配され、永山屯田まつりなど他のまつりが横ばいだったのにもかかわらず、さんろくまつりは前年度より 150 万円増額された。市の担当者は、「夜の賑わいを取り戻せば、観光客が飲み歩いて旭川に泊まれる滞在型観光に展望が持てる」と説明する。面白かったら来年もくるのがまつりの基本になり旭川の風物詩と変化し、まつりの成功も助成金の増加により「市も認めた」と言えるだろう。

毎年問題になるのが、ゴミ問題である。現在では、まつり期間中以外にもゴミ問題にさんろく街は取り組んでおり、景観美化を重視している。まつりの最中は「クリーンアップタイム」という、ダンスミュージックにノリながらステップを踏み会場を巡回し、清掃活動を行う試みをはじめた。さんろく自体がゴミ問題で、組合をはじめ市も動き始めているのだから、まつりのときのその動きを周知のものにしようと言うことで、有効的な活動と言える。そして、「クリーンアップサポーター」として、「キレイで気持ち良い会場でまつりを楽しむ」また「ゴミの分別を徹底する事で、街そして環境づくり」に積極的に取り組む人々がおり、パフォーマンスを行いながら、ごみの分別・ポイ捨て禁止の呼び掛け等を行っている。運営面と参加者が共通の意識を持ち、環境やゴミ問題に対して取り組んでいる。

近年では、実行委員高齢化が気になっているが、さんろくまつりには若者の存在やパワーは欠かせないものとなっている。来客者の若年化はもちろんまつりに活気を与え、裏方として、ラーメンフェスティバルの器や食べ残しを片付けたりゴミを拾ったりと、まつりをステージで盛り上げるだけではなく、彼らの活動にも目が離せない。そして、未来の実行委員として、一回限りの参加ではなく継続的に協力しこれからもがんばってもらいたい。

【写真 1-5 ゴミ対策】

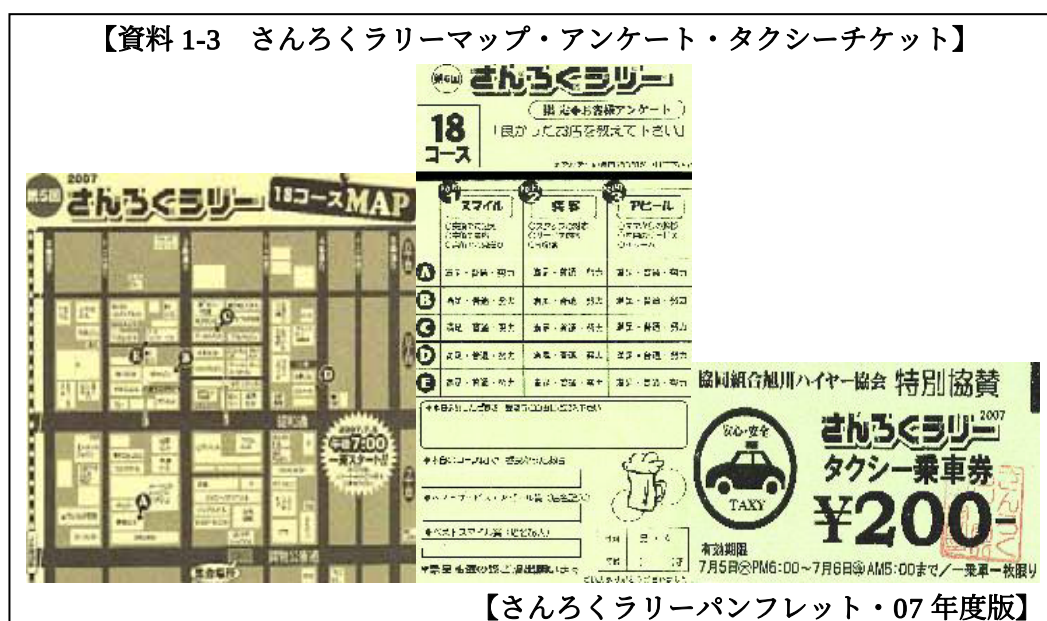


【さんろく祭りパンフレット・08 年度版】

1-4-2 その他

①さんろくラリー

2002 年から開始され、毎年 7 月第 1 木曜日に行なわれる飲み屋のスタンプラリーである。この企画も主催は振興組合で、新規開拓や店のマナーや営業努力の発表会と位置づけ、加盟店の約 100 店の中からきめられた 20 コースのうち一つのコース、店を 5 軒まわる。その際に、それぞれの店の接客態度・酒の味・店の雰囲気などを評価し、参加者にはマップが渡され、一軒目は組合から混雑を避けるため指定されるものの二軒目からは自由に回ってよいことになっている。様々な参加者がいるため、その中での客同士の交流などにより、店の情報交換など、新規開拓のほかにお客同士の新たな出会いの場など様々な効果が期待される。また、店同志が切磋琢磨するため、接客マナー向上にもつながる。しかし、さんろくまつり同様に、常連の客が他の店に取られるなどの苦情も出ることがある。しかし、やはりここでもラリーに参加していてもしていなくても「企業努力」が問われている。帰りは、提携されたタクシー会社と協力し割引券を配布するなどタクシー業界にも貢献し、飲酒運転撲滅にも力が注がれていることが伺える。



②さんろく感謝の日

毎年 3 月 6 日に行われる。まず、参加加盟店を募るために毎年挨拶に一軒一軒歩いて回り、資金を集めたり参加にこぎつけている。これには、組合の人が丁寧に足を運びさんろく街活性化のために努力している。店側として参加することで、新規開拓や必ず 6 日は繁盛すると言うメリットがある。参加する側は 2000 円と安値で二軒回って楽しめる。ポスターに宣伝文句に「一軒の値段で二軒回れる」と強く書いてある通り、格安で楽しめるのでお酒好きにはとっておきのおもしろい企画である。



③個人で開いた催し

組合主催以外にも、かつての賑わいを取り戻そうと個人企画の様々なイベントが行なわれている。

「旭川ディスコファンクラブ」が開いた 2004 年のディスコ復活祭など、普段はさんろくに足を運ばないような人々、以前さんろくで遊んでいた人たちがさんろくに来てくれればということで、30～40 代の女性たちを中心に 70～80 年代のディスコミュージックに乗って体を激しく揺らしていた。「ディスコで踊るのなんて 20 年ぶり」という声もあり、かなりの盛り上がりを見せた。仕掛け人は会社経営の浜田紀明氏、自らもさんろくでバーやクラブを経営し、80 年代には市内の DJ として知られた存在である。旭川で火がついた曲もあるあるほど、実は旭川は「ソウルな街」でもあると言う。

ほかにも、さんろく街のママさん有志でつくる「さんろくマザーテレサの会」は、04 年 2 月 11 月に「はしご酒大会」を開いた。90 分で 5 件の店を回る。「次はどこへ行こうか」と、参加した客が街を行き交い反響は上々で、実際にこの企画に参加して、新規客ができ、それだけではなく、参加した店同士がほかの店に負けぬよう切磋琢磨し、工夫の凝らした店作り、企業努力を続けている。こちらの企画は、05 年 10 月にも第三回はしご酒大会として行われている。受付を終え、参加者たちは企画加盟店のスナックやクラブに足を運ぶ。店内では見知らぬ客同士や、初めての店でママさんと意気投合し、そのまま常連に新規開拓につながっていく。

ただ、お客さんを楽しませるだけではなく、「客を迎える姿勢を大切にする」ということを店側が自覚することのできる企画でもある。例えば冬は、店の前の氷割りや砂まきをするとところが目立つ。夕暮れが早いから、看板の電気を早めにつけるなど、小さな思いやり、さりげない気配りがされる。

【写真 1-6 賑わう企画・はしご酒大会】



【旭川さんろく物語】

1-5 昼間のさんろく

さんろく街と言えば「夜の街」であるが、昼間のさんろくは「閑散」としている。

夜とは全く比べ物にならないほど、人影もなく多くの店にはシャッターが降りていて営業していない。

夜にさんろくを訪れる人々は、日中仕事や学校に通っており、昼間のさんろくに足を運ぶことはまずない。なぜなら、昼間のさんろくには何もないからである。時折、お酒やおしぼりの搬入の仕事の車が停車しているだけで、車の数も少なく、歩行者も数える程度である。中心部にも関わらず、タクシーは全く見つからない状態である。そして、昼間のさんろくで最も特徴的なのは、ネオンが一切光っていないことである。夜の華やかな雰囲気から、一気にゴーストタウンのように野良猫ばかりうろついている。

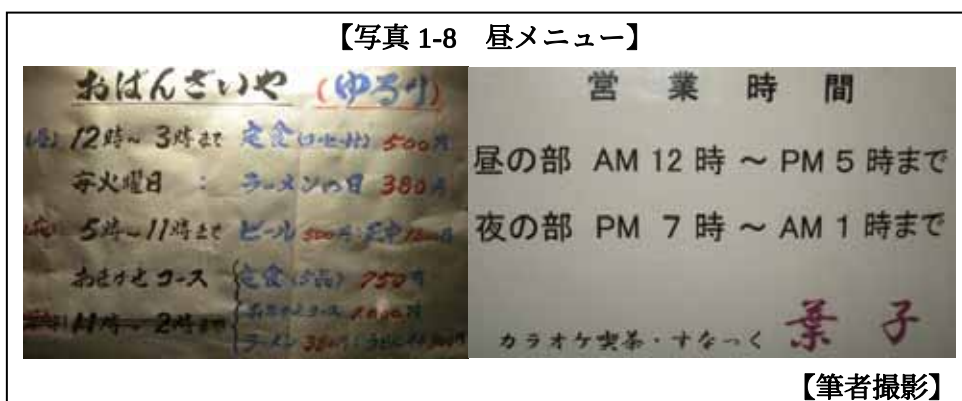
【写真 1-7 さんろくの昼夜比較】



【筆者撮影】

そんな中、すずらん小路の中に「カラオケ喫茶」といい、日中にお茶を飲みながらカラオケを楽しむスナックがある。そこのママさんに尋ねたところ、昼と夜のお客の違いは、年代と言っていた。昼間は 80 代から 60 代までの退職者が多く、純粋にカラオケを楽しみにきており、歌いながら会話をしたりお茶を飲んだり楽しんでいる。また、夜の時間になるとカラオケも歌われるがもっぱらお酒を飲むことが中心になり、店を訪れる年代は 20 代から 40 代のサラリーマンや仕事帰りの人が多い。夜と昼では客層も違えば、その同じお店にも関わらず目的も全く違うのである。また、なぜこのような営業時間なのか尋ねたところ、「昼間やってもやらなくても同じ家賃を払うので、どうせならやったほうがお客さんが足を運んでくれる」と、教えてくれた。お惣菜やさんも同じように営業しており、夜と昼ではメニューが違う。そして、どの店にも共通して言えることは、昼間のさんろくを出入りしているような人々は、既にその店の常連になっている人ばかりであった。

【写真 1-8 昼メニュー】



【筆者撮影】

カラオケ喫茶同様に、2・3 仲 6 丁目に昼間は喫茶店「石庭」、夜はバー「SEKITEI」という二つの顔を持つ店もある。昼間の喫茶店は、やはり客層は常連と決まっており営業時間は 11 時から 16 時までで喫茶店の近所の人やさんろく界隈の店主が訪れる。彼らは、いずれも 20 年以上喫茶店に通い詰めている人々で年齢層も高く、新規のお客さんはなかなか昼間は訪れないという。その理由として、まず人通りが少ないといことと、ここで喫茶店が営業していることを知らないなどがあげられる。また、2006 年 6 月の道路交通法の改正により、放置車両の確認を行う駐車監視員が出現した。駐車監視員とは、放置車両確認事務の業務を委託された、民間法人の二人一組の水色の制服を着た従業員を指し、違法駐車対策の強化のため・放置違反金制度の新設・放置車両確認事務等の違法駐車対策の推進を図るための規定が整備された。その一環として、放置車両確認事務の業務が民間法人に開放され、警察署長が公安委員会に法人登録した法人に業務委託が可能になった。

昼間のさんろく街も取り締まりの対象地区となったため、「わざわざ駐車場に停めてまでお茶を飲むという気持ちにならないのでは？」と、常連さんは言う。しかし、車で訪れる常連さんもあり、そう言う方々は、監視員の居ない時間帯や監視員が来た場合の回避の仕方を熟知している。

常連客は一時間程度滞在し、お茶を飲みおしゃべりをし帰っていく。店自体は 11 時と 3 時ごろに分かれて客がやってくることが多く、11 時ごろは近所の人が軽いランチを兼コー

ヒーを飲み、3 時ごろからはさんろくの店主たちが開店前の息抜きでコーヒーを飲みに来る。いずれにしても、こういった喫茶店はさんろく街の情報交換や世間話など井戸端会議を行なう場所にもなっている。

【写真 1-9 昼夜で二つの顔を持つ店】



【筆者撮影】

そのほかにも、防災上の課題が浮き彫りになっている。まず、盗難や空き巣被害である。昼間のさんろく街は閑散としており、特に雑居ビルの中には人はいないだろう。実際に今井ビルの3階空き店舗を狙った空き巣や、昼間の店舗に忍び込み、前日の売上げが盗難される被害なども起きている。新しいビルになれば、セキュリティ機能があるのかもしれないが、さんろく街の多く古いテナントビルにはセキュリティ機能などなく、古い鍵が一つや二つ程度で、バールなど鋭利な工具ですぐに破壊され、進入することが出来てしまう。

そのほかにも、歌舞伎町ビル火災のような事例もある。このような事故はさんろく街で起きても不思議ではない。また、放火の可能性は夜間よりも昼間のほうが確率が高い。雑居ビルは、その形態によりいくつかの問題がある。まず、管理者がはっきりしないため防災責任者が曖昧である。そして、入居者の活動によって避難経路にすら可燃物が置かれる事が多くこの状況は一旦火災が発生すると、入居者らによる初期消火や避難誘導が行われなかったり、防災設備の不備・避難経路が無くなるなど、これはビル自体の所有権が分割されることにも原因がある。雑居ビルでは、共同スペースである通路や階段にゴミや商品などが放置される傾向にあり、これらの可燃物が火災発生時に煙突化現象で延焼被害を悪化させる。また、廊下や階段に放置されたゴミ等は恰好の放火対象になる。複数のテナントが出入り口や通路を共有しており不特定多数が出入りしやすい傾向もあるが、このことは総合的な防災責任者の不在とあわせて救助の際に被災者の実数把握を困難にしており、これにより要救助者の放置などが起きやすい。

さらに恐ろしいことに、放火犯も出入り自由となる。特に老朽化した雑居ビルは古くからの歓楽街など煩雑とした地域に多く、交通の便が悪かったり、違法駐車が道を塞いでおり、消防車が搬入できないなどの問題がある。また、災害が発生すると野次馬が集中するなど、消火活動を阻害する要素も多い。なお消防法などの防災上の法令違反といった問題

がある一方で、こういった雑居ビルの中には暴力団関係筋による違法営業などの問題あるテナントもしばしば存在する。ゲーム機賭博や風営法上で芳しくない違法業態などから不特定多数が出入りする事と行政側に違法実態を察知される事を恐れ、防災上の立ち入り調査を拒否したり営業の実態が隠されるなどの問題が散見される一方、テナントの客である利用者側にも、後述するように醜聞の露見を恐れる意識が働き、避難が遅れるなどの問題もある。

店主もセキュリティ強化や、売り上げを毎日持ち帰るなど、警察にパトロール強化を申請するなどの自衛努力が必要である。

2 さんろくと時代的变化

2-1 日本経済とさんろく

「さんろく街は旭川経済を反映する鏡」や「旭川の景気のパロメーター」と言われている。現在のさんろくは昔のような派手できらめいたイメージではなく、活気がないというマイナスイメージが強い。そんなさんろく街の変化を述べる。

まず「高度経済成長期」と言われる日本経済が飛躍的に成長を遂げた 55 年からオイルショックまでの 73 年の 18 年間である。当時は日本中が右肩上がりの経済好況でももちろん旭川市もその影響を受けていた。そのころから旭川市も栄え有名企業の営業所の設置などから、旭川市に移転する人々の人口も増加、さんろく街にも店舗がちらちら開店し出した。そして、65 年前後からの飲食店急増により飲食店ビルへと出店形態の変化が生じ、さんろく街の中にますます店が増える要因となった。この頃からネオン看板が登場し、さんろく街が形成され、すすきのに次ぐ歓楽街に成長していった。

さんろく街は高度経済成長時に発展し続け、80 年代～90 年代前に全盛期を迎える。当時の日本は「消費社会」真っ只中であり財布の紐も緩く、生活費のほかにも外食費や交際費に大金をつぎ込んだ。この頃のさんろく街の人では 1 万人以上が働き、20 名以上の従業員を抱えるクラブが多かったという。それ以上に、さんろく街を行き来するお客たちの肩がぶつかるほど出入りが激しく、平日は 5000 人程度の客足で、特に「はなきん」とよばれる週末の賑わいは激しく、帰りに使用するタクシーを捕まえるのが困難だった程、さんろく街は人でごった返していた。あるドライバーさんは、「78 年ごろが一番忙しく、昭和通りの両脇にずらっと客が並んだ。今みたいに客待ちタクシーなんてなかった」という。

その後の 91 年～2002 年頃、「バブル崩壊」、「失われた 10 年」や「平成不況」と呼ばれる歴史的な不況の時代が訪れた。この不景気の期間は日本経済史上最長で、日本経済と同様に北海道の地方都市も衰退の一途を辿り、「就職氷河期」が訪れ、失業率の上昇、中小企業の倒産、非正規雇用従事者の増加、それにともない財布の紐がきつくなった。

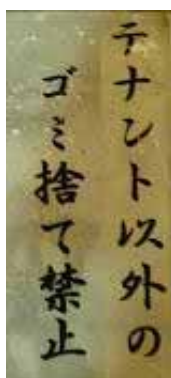
鉄道マン、郵便局員、役所関係の人々にも逆風が吹いた。日本国有鉄道（国鉄）が 87 年 3 月 31 日に国鉄分割民営化、99 年に上川合同庁舎の永山移転、経費削減を迫られた企業による「接待控え」、95 年ごろ発覚の道庁の食料費不正、官官接待問題への厳しい目がさんろくから足を遠ざけていった。中心部に営業所を構えていた会社が郊外に移転するなどますます人が減り、職場の飲み会でも一次会で帰る人が多くなった。宅地が郊外へと広

がった結果、自宅周辺で飲めることや地域住民ばかりという気楽さから郊外の居酒屋も増加しさんろくから客を減らした。ここ数年は、クリスマス後は人の出入りが減り、正月はシャッターを降ろす店も多くなった。「昔は、クリスマス・正月などイベント時期であれば、客同士が肩がぶつかるほど、人でごったがえしていたのに、近年では新年会などの客で、活気を取り戻すのは三が日が明けてから」という証言もある。外食をせず家で晩酌をする人も増えた。2000 年ごろから大体 9 時半最終だった路線バスが、深夜バス営業を開始し 11 時台のバスが登場し、タクシー利用率が低下した。

現在では、平日だと 2~3000 人、週末は 5~6000 人がおとずれる。さらに、旭山動物園効果により観光客を招き入れようと努力が見られる。店舗によっては外国語のメニューを用意するなど、時代の変化に合わせた努力が伺える。また、20 代後半から 30 代後半のお客さんをターゲットに、店の中で遊べるようにダーツが置いてある店もあり、今の若い世代は酒やカラオケの他に店に「遊び」も求めるように、さんろくにも変化が訪れている。飲食店の数が 1000 軒を切ったと言われ、いかに客を呼ぶか、店だけではなく社交組合・旭川市の問題にもなっている。娯楽・生活様式・所得・好み・客層の変化など、さんろくも時代の変化とともにそれぞれが模索し努力している。

そして、市と組合が協力し、ロードヒーティングの設置やゴミ対策などが行なわれている。ロードヒーティングの設置工事などは市が行い、電気代はロードヒーティングが面している店が支払う形となっており、テナントビルの場合は折半である。使用期間は 12 月からの 4、5 ヶ月でひと月 9 千円程度である。ロードヒーティングを使用するもしないもその店舗オーナー次第であるが、大半のオーナーは組合からの誘いに乗り使用している。ゴミについては、黒いゴミ袋の際はカラスに突かれてゴミが散乱しており、開店前には店の前の掃除から始めなくてはならなかった。また、悪臭も強く飲食店にはそぐわないものであった。そんな状況に見かねた市と組合は、店舗を回りゴミを外に放置しないように申し出た。そして、ビルごと、店ごとで頑丈な大型ゴミ箱を用意してそこにゴミを集めるという制度を徹底し近年ではゴミに悩まされることが少なくなった。しかしながら、大型のゴミ箱を用意したため、さんろく街の店舗以外の人々、一般市民がさんろくまでゴミをもちこみ捨てるという問題も多発しているなど、これからも改善していく点がいくつか出てくるだろう。

【写真 2-1 さんろく街のゴミステーション】



【筆者撮影】

【写真 2-2 現在のさんろくの街並み】



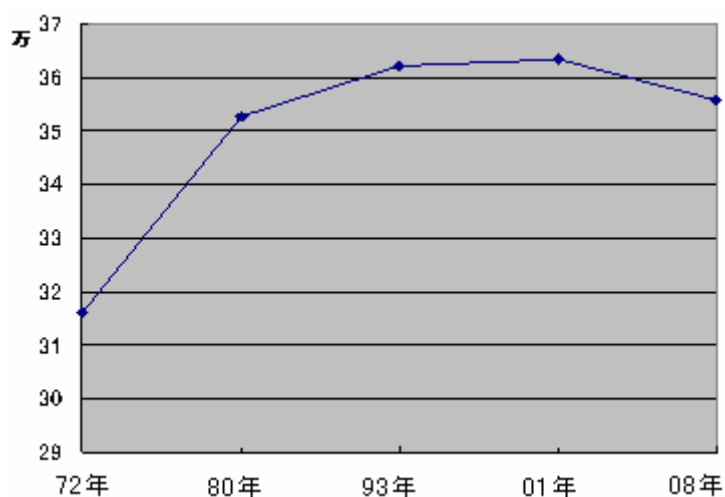
【筆者撮影】

2-2 旭川市の人口変遷

さんろくに訪れる人々は近頃減少気味だが、旭川市自体の人口は減っていない。72 年は 316085 人、80 年は 352793 人、バブル崩壊後 93 年あたりから落ち着き、36 万人を突破。そして、2001 年 363243 人に、とうとう 06 年に 358393 人と、36 万人を切ってしまった。08 年は 355694 人となり現在も減少し続けている。

さんろく街の 3・6 と、36 万人都市の 3 と 6 と言うことで、語呂合わせ的によくガイドブックなどで紹介されるときには、「36 万都市・旭川の繁華街 3・6 街」などと表現されていたのだが、近年人口が 36 万にを切ってしまったため、これでは不当表示になってしまふ。また、個人的に旭川市といえば人口 36 万人なので 35 万ではなんとなく納まりが悪い雰囲気がある。

【表 2-1 旭川市の人口変化】



【データ引用：住民基本台帳】※人口はどの年度も全て 9 月末のもの。

2-2-1 ドーナツ化減少

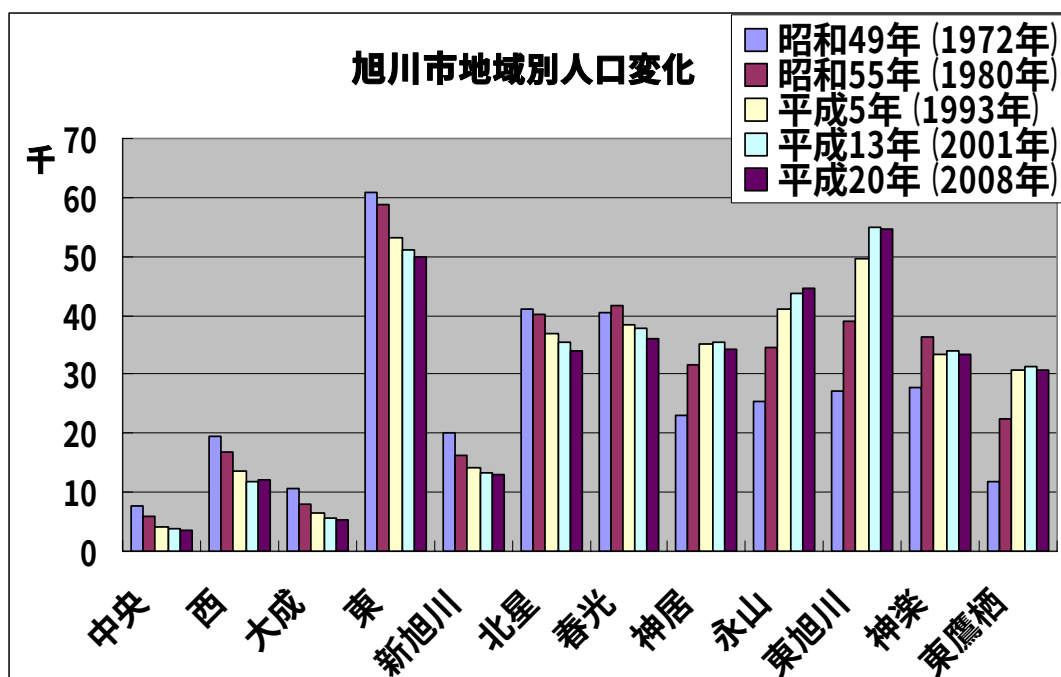
先にも述べたように旭川市の人口自体は、多少なりとも上下はしているものの、大きな変化はなく、安定しているといえる。

各地区ごとに見ていくと、さんろくのある中央地区をはじめ西地区・大成地区では 1972 年から減少がつづいている。西地区・大成地区は比較的、中央地区に近い同様な傾向が見られるのではないかとと思われる。

次に東地区は、1972 年をピークに減少傾向になっているのは、先の 3 地区と同様の傾向である。2008 年には東旭川に次ぐ二位になっている。東地区・東旭川地区（東旭川町のみ 63 年編入合併）は、隣同士の地区なので市全体の人口は東側に集中していることがわかる。新旭川地区・北星地区も同様に 1972 年を境に減少がつづき、春光地区は 1980 年をピークに減少している。神居地区（55 年編入合併）・永山地区（61 年編入合併）・東旭川地区・東鷹栖（東鷹栖町地域のみ 71 年編入合併）など編入合併した地域では、1980 年に急増している。特に永山地区・東旭川地区は旭川の中でも多くの人口を抱える地域になった。神楽地区（68 年編入合併）で 1975 年に緑が丘ニュータウン造成完工するなど、郊外への宅地がどんどん進み中心部から人が離れていった。

72 年に平和通り買物公園オープンし、全国にさきがけ歩行者天国となったことにより、75 年に西武旭川店が開業するなどデパートや商店が中央地区に増え、中心部が宅地ではなく商業地区化していったこともドーナツ化現象の要因とも言える。

【表 2 - 2】



【データ引用：住民基本台帳】

※人口はどの年度も全て 9 月末のもの。

2-3 郊外の飲食店

先に述べたように、旭川の人々はさんろくがある中心部よりも、永山地区や東光・豊岡など東地区の多数の人々は住んでいる。もちろん、そういった人たちもさんろくに来て飲んで騒ぐのだが、毎日訪れるわけではない。仕事帰りに立ち寄るにしても、近年では東旭川地区に工業団地が造成されて、工場や営業所が中心部から移転し、永山地区では「流通団地」に物置や問屋多く建設され、家からさんろくにいくよりも、仕事場に行くほうが近いなどの理由から、中心市街地に足を運ばなくなった。

また旭川市には、さんろく以外にも安くお酒が飲めたり、おいしい料理が食べれる店が多いということも、さんろく街から客足が引いてしまった要因と言える。そういった地域について説明する。

2-3-1 駅周辺

旭川に限らず比較的どの地域でも駅前には飲み屋が多い。それは、通勤通学で汽車を使うことが昔はごく一般的だったため、駅前には飲み屋や食堂など安い店が多かった。駅周辺には商店が多いため自然に人が集まってくる。

「旭川駅前」は、今でこそ「アサヒビル」の跡地にホテルが建設中であるが、以前アサヒビルには多くの飲み屋・食堂があった。時代が変わるにつれてテナントは衰退していき、建物の老朽化などにより取り壊しが決まり、新しくあの場所にホテルが建つ予定である。だが、不景気の影響で工事がなかなか進行していない状態である。バナナ焼きで有名な「だるまや」（現在は2条13丁目）など、飲み屋以外の店が多い。バス停の近くということで、冬は寒さ凌ぎにビルの入り口付近に立ち止まる人々が目立った。また、地下にあった居酒屋では300円ほどで学生ラーメンを提供していたが、ビルの取り壊しと同時に店は姿を消していった。金魚やカメなどを取り扱うペットショップがあったり一階にはたこ焼きやなど、飲み屋以外にも市民が集う場所として栄えていた場所であり、戦後の復興を象徴する建物として旭川市の歴史的建築賞を受賞している。

また「ステーションデパート」という駅の地下に薬局や本屋などの店舗とともに飲食店が何軒かあった。地下ということで、決して人通りが多いわけではないのだが、顧客はしっかりついてた。地下封鎖と同時に店舗郡も撤去し現在は、地下に下る階段を埋め立て跡にはあさひやま動物園グッズショップがある。ここでも、時代の流れや変化を強く感じることができる。

現在では「駅前ビル」のみになってしまったが、美容室や服屋などと一緒に飲食店は踏ん張りどころである。このまま、駅前ビル前はイオンバスの発着点で多くの人が列を成し、駅前ビルには目もくれずに郊外のショッピングセンターに流れてしまう。特に若者にそういった傾向が強く見られる。駅前ビルには若者をひきつける魅力が足りないのかもしれない。西武百貨店や丸井などデパートも経営不振である。買物公園や駅前が協力し合うことで再び活気を戻すのではないだろう。旭川駅自体も駅舎の移転のため現在工事中であるが、これから駅前再開発などで再び活気が戻ることを祈っている。

【写真 2-3 多くの飲み屋があったアサヒビル】



【引用：北海道観光大全】

「旭川 4 条駅前」は 4 条 18 丁目にあり、旭川駅に比べると人通りや利用者数は少ないながらも、住宅地やマンションが周辺には多い。また銀座（1 条～4 条の 14 丁目付近）や三番館（3 条 14 丁目）の近くにあり、高架下に商店街・飲食店・理容店が並んでいる。

この場所は以前、市電の駅もあり国鉄利用者と市電利用者の人の流れがあった。その頃は現在のように旭川駅周辺のデパートや郊外の大型店がまだ存在していなかったもので、家の近くで買い物や飲食をすることが中心で、生活拠点が 4 条駅周辺に集中しており、そのおかげで当時は居酒屋や商店が賑わっていたようだ。

しかし、昭和 47 年に市電が廃線になり路線バスに移行、買物公園のオープンにより消費者の移動、中心地の営業所の立地などの理由により 4 条駅から人びとが減っていった。

現在は、数えるほどの店しかないものの、老舗居酒屋として地元住民の年齢層の高い人たちが出入りする店として頑張っている。

【写真 2-4 57 年頃の 4 条駅周辺】



【引用：路面電車 HP】

【写真 2-5 現在の 4 条駅周辺飲食店街】



【筆者撮影】

「永山駅」は前の二つの駅と違い駅前にすぐ店が並んでいるわけではなく、100m ほど離れたところに数軒の店が連なりネオン街が形成されている。

この地域は、61 年の旭川市編入合併がなされるまで、永山町として町の中心部であった。

そのため、比較的賑わった地域であり居酒屋の近くにすぐ住宅街がある。また、店舗の特徴としては自宅兼居酒屋という形式をとっているところが多いのが目立つ地域である。帰り道に立ち寄る以外に、住宅街がすぐ近くにあるので駅を利用しない人たちや近所付き合いを兼ねて地元住民がお客として訪れている。飲んだ後少し歩いただけで帰れるということとは非常に魅力的である。

駐車場のスペースが多いにも関わらず路上駐車が目立つが、これは、交通量が旭川駅前や4条駅と比較すると非常に少なく、夜間の時間帯は極端に車の通りが少なくなることと、中心部に比べると駐車違反取り締りが厳しくないためと考えられる。

しかし、永山駅周辺も看板はあっても電気のついていない店舗があり、居酒屋の衰退の傾向が見られる。しかしながら、昔の中心市街地と言うだけありネオンが激しく光り輝いていた。

旭川市の駅周辺の飲み屋街もさんろく街と同様に活気が失われつつあるものの地元住民に支えられながら今も昔も変わらず営業している。

しかし、地元住民に支えられている店は顧客の固定化が生じている。そして、その顧客たちの高齢化も新たな問題である。駅を利用しない人、駅近くに住んでいない人たちはなかなか訪れることの少ない盛り場であるが、歴史を感じさせる老舗居酒屋が多い。

【写真 2-6 永山駅周辺のネオン街】



【筆者撮影】

2-3-2 大学周辺

北海道大学の周りに安い飲み屋が多く並んでいるように、学生街にも盛り場が形成されやすいと言われる。旭川市にも北海道教育大学旭川校（以下・教育大）、旭川医科大学（以下・医大）、旭川大学（以下・旭大）、東海大学旭川キャンパス（以下・東海大）の四つの大学がある。

教育大の周辺では、「鳥しん」、「えん」、「のした」など、学生たちがよく足を運ぶ飲み屋が多い。料理に限らず飲み放題も安い。学生たちは騒いだり店内を荒らすもことしばしばあるため、店側から「出入り禁止」を通達されるなど、学生を敬遠する店もある。この傾

向は、大学周辺に限らずさんろく街でも見られる。

学生街にある居酒屋の特徴としては、大学の近くに店があるということで、学生をアルバイトとして雇っている店が多い。バイト先と自宅が近い店が助かるだろう。また、教育大だけに限ると、近くに陸上自衛隊の駐屯地があるため、自衛官のお客さんも多いようである。

【写真 2-7 教育大近くのうまみ屋川端店】



【筆者撮影】

医大周辺は、学生街にも関わらず飲み屋が少ない。大学周辺には中学校・高校など多く未成年が行き来するため、アルコールを出す店が少ないのではないかと推測される。医大自体 71 年に開校した大学であり歴史がまだまだ浅いということと、大学開校時期と同時期に緑が丘地区に住宅街が形成され始めたため、飲食店としてではなく宅地としての土地利用が多く、そのため飲食店が少ないと考えられる。

旭大は、永山駅の近くにあり、その居酒屋を利用する学生たちも多いのだが、駅が近いこともあり車やバスを利用して旭川駅まで出て、そこからさんろくに訪れる学生が多い。これは、学生の割合よりも店の割合が少ないことなどが影響していると考えられる。

東海大の周辺には、まず店舗が見当たらない。旭大と同様に、バスを利用してさんろくに訪れる学生が多い。

どの大学にも共通して言えることは、飲み会の候補地として必ずさんろくが候補に入ってくるだろうということであり、学生は少なからずさんろくで飲み会を経験していると考えられる。

学生が旭川に就職したり戻ってきた場合は、大人になっても学生気分でさんろくに限らず、旭川の居酒屋でどんどん騒いでもらいたい。

2-3-3 地域の居酒屋

さんろく街・駅周辺にも以外にも地元で根付いた居酒屋が旭川にはある。そのなかでも、豊岡・神楽・神居・永山の 4 つについて取り上げる。

豊岡の地域（豊岡 5 条 1 丁目～東光 7 条 1 丁目付近）の居酒屋は、近くに団地があり住宅街の中にある。交通量もなかなか多く人通りの多い地域といえるだろう。また、国道 12 号線もすぐ近くを走っているため、バスも数多く通りアクセス条件は最高である。個人的には、旭川市の地域居酒屋としては最大級の盛り場なのではないかと考える。9 条通りに

突き当たるまで、スナックや居酒屋などのネオンや看板も派手で目立っており、駐車場が小規模で狭いため徒歩もしくはバスなどでの来店が多いと予測できる。

【写真 2-8 豊岡地域の居酒屋】



【筆者撮影】

次に、「神楽の地域の居酒屋（裏参道付近）」であるが、ここも住宅街のなかにある。裏参道の比較的車の通りが多いところに店が多く、ここもバス通りである。豊岡同様に駐車場が小さいので徒歩もしくは公共交通機関を利用して訪れる客が多いだろう。裏参道だけではなく神楽岡公園の横にも串揚げ屋があるなど、分布の広がりを示している。

この地域には、大人だけではなく医大生たちも多い。緑が丘の「グリーンプラザ」という商店街があるのだが、そこも昔飲み屋が多く立地していた。しかし、くにいデパートの倒産や不景気を期にグリーンプラザは衰退し、テナントビル内の飲み屋が激減した。そのため、少し離れた裏参道の居酒屋に流れたのではないかと予想できる。

この神楽・緑が丘地区は医大の官舎や、市営住宅、緑が丘ニュータウン、神楽の住宅街があり、旭川でも多くの人口を抱える地域であるため、客の母数は非常に多い。

【写真 2-9 神楽・裏参道の居酒屋】



【筆者撮影】

永山地域の居酒屋（永山 6 条 5 丁目～16 丁目付近）であるが、永山せせらぎ通り自体は約 2800m あり、そこにコンビニエンスストアやスーパーと一緒にスナックや居酒屋が通りに面して多く並んでいる。特にこの地域では、住宅と住宅の間にスナックのネオンが光っていたりと、住宅地に組み込まれている飲み屋街と言える。

とりわけ目を引くのが「看板のデザイン」である。独特で目立つものが多く珍しいネオンの色であったり、看板の形が個性的である。特に永山灯台という店の看板は灯台が屋根の上ののっており、遠くからでもわかるようになっていておしゃれである。

永山地区は営業所や事務所、工場が多いため会社の飲み会が永山の地域の居酒屋で開かれることが多い。

【写真 2-10 永山灯台】



【筆者撮影】

神居の地域の居酒屋は、範囲が広く店が固まっていないのが特徴である。神居付近の神居 3 条、7 条、井の沢スキー場の下などバラバラに店がちらばっている。今回は神居 3 条 10 丁目の「スナック・山」について取り上げる。

この店が開店したのは 99 年 12 月 8 日で、美瑛の元牛舎オーナーの村田さんがマスターとして、山本ゆかりママと営業している。「山」と言う名前はインパクトが強くみんなに覚えてもらいやすい名前ということで決定した。店の外装はママさんのデザインも店内のインテリア配置も自分たちで考案して設置した。この店はテナントビルの一階にあり、理容室が隣接している。家賃もさんろく街に比べるとリーズナブルで酒の仕入れも格安に済ませ、その分お酒の価格を抑えることができるという。店の営業時間は 17 時半から 24 時までだが、お客さんは大抵神居の地元住民で 22 時くらいには帰宅し、神居以外の人々は終バスが 22 時なので大体その時間帯にお客さんが引いていく。また、さんろくは店舗によって年齢層がバラバラだが、山の常連さんは 60～70 歳の男性が多い。当初は昼間も営業していたものの、ママさんの体力が持たないということで夜のみの営業となっている。従業員は実質ママさん一人のみで、たまに学生のアルバイトを雇っている。

地元神居の夏祭りに参加し地域を盛り上げて貢献してたり、「地域密着」を強く心がけて

いる。マスターは、以前神居の某ホテルでバスの運転手をしており、そこで神居近辺の人々と交流を深め、現在でも店のお客としてだけではなく、改装時のお手伝いなど応援してくれている。

神居地区の居酒屋も衰退傾向にあり、現在神居 3 条の飲み屋は、山とお向かいの一軒だけになってしまった。

【写真 2-11 神居十字街のスナック・山】

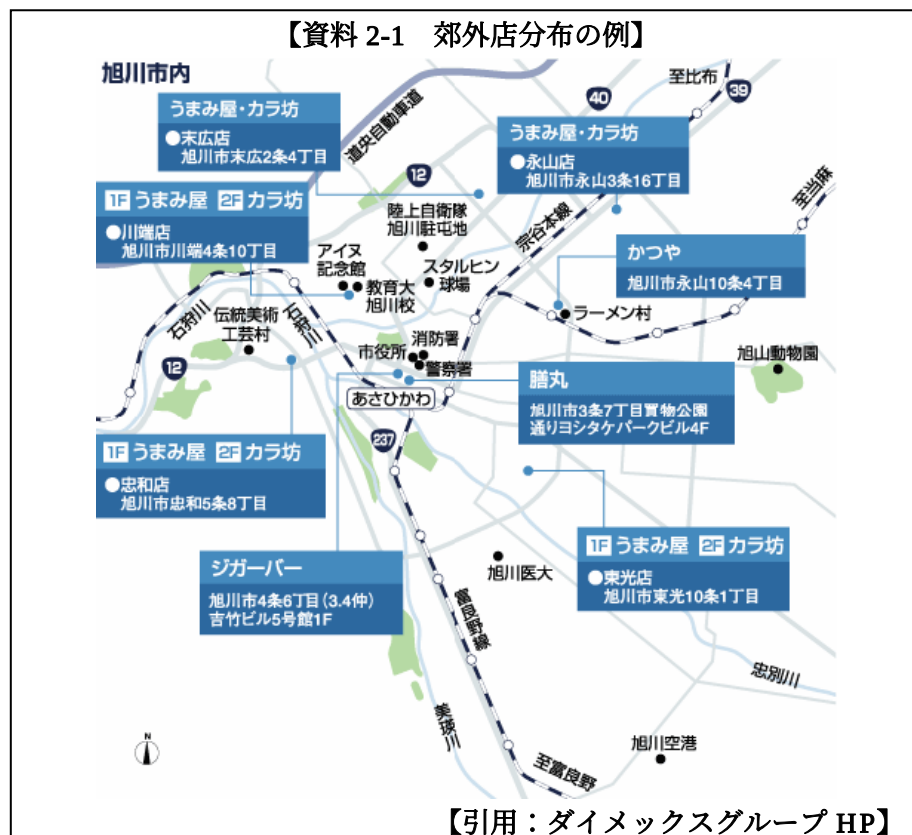


【筆者撮影】

地域の居酒屋は、テナントの店もあるが自宅兼店舗という店が多い。さんろくよりも家賃が安いので料理や酒の価格が安く提供できる。旭川では川端・豊岡の「鳥しん」のような姉妹店はあっても、チェーン店は少ない傾向が見られる。共通点として、営業時間がさんろくより短いこと、雇っている従業員も少数もしくは家族で経営していること、バス通りの近くに立地されているということが挙げられる。これらの共通点は、駅周辺の飲み屋でも同様である。

2-3-4 大型チェーン店

先にも述べた様に、川端には「うまみ屋」があるのだが、このうまみ屋は、ダイメックスグループのチェーン店であり、川端以外にも永山・末広・忠和・東光など市内に店がいくつもある。どのお店にも共通しているのが、国道や環状線など比較的大きな道路の近くにあり、駐車場を完備していること、そして「カラ坊」というカラオケ施設を併設しており、一次会・二次会と一つの場所で済ませることが出来ることである。比較的住宅街が近く、家族連れで訪れる客も少なくない。質の高い料理やお酒も低価格で設定されており、ポイントカード制度などもあるためリピーターも多い。



近年では、さんろく街にもチェーン店が進出してきている。「コロワイド北海道」は、横浜に本社を置く外食チェーン「コロワイド」の子会社である。既に釧路・帯広に出店しており、旭川のさんろくにも出店してきた。出店形式は、新しく建物を建てるのではなく、既存の飲食店ビルのテナントということで、店が変わる以前にそこで働いていた従業員に引き続き働いてもらう形を取っている。面接と指導を徹底し、「料理」と「接客」力を注いでいる。

旭川の出店責任者は、日中は前日の売り上げチェック、各店舗の店長との個別打ち合わせなどをし、夜は店の見回りをしており昼夜問わず仕事に勤しんでいる。客獲得のために広告・チラシ配布など呼び込みを効果的に行ったりと「お客を待っているのではなく、獲得する時代になってきている」と、責任者は言う。さんろくでは、常連やお得意様が多く、老舗と呼ばれる店も多いのだが、そんな中、若年層に限らず様々なお客さんに対する細かな対応や宣伝などが、さんろく街でも際立っている。また、普通は紙やラミネート加工されているメニューが一般的なのだが、この店では電子端末のメニューを導入、また電子マネーを使用したクーポンなど、新しいものをどんどん導入してきている。

さんろく街の店でも同様にホームページやフリーペーパーなどにクーポン券を掲載している店も多いのだが、こういったチェーン店がいち早く導入している傾向があり、効率よくより多くの顧客を作ろうと努力している。また、価格が低いということはポイントが高く、気軽に来店できる。

3 さんろくの人

さんろくには多くの人がいる。仕事をする人、遊ぶひとなど様々な人が訪れる。

3-1 地元客

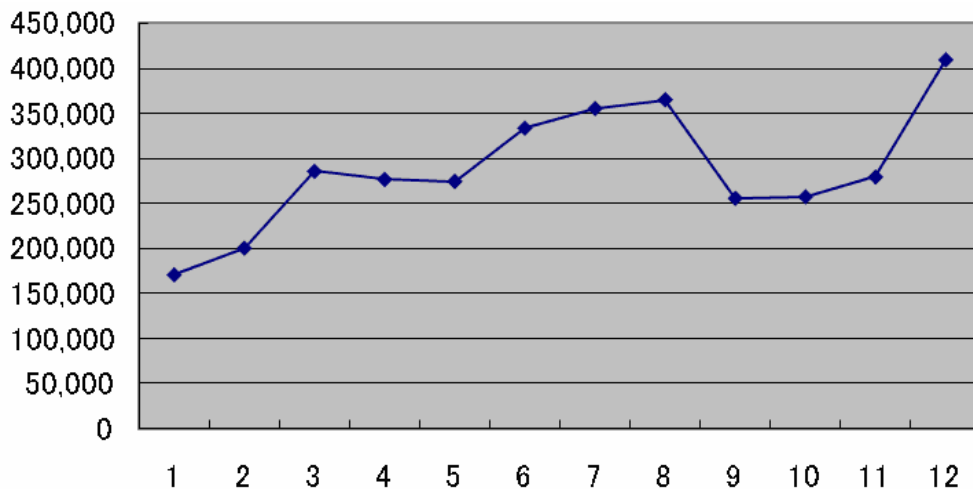
近年では、先にも述べたように旭川市もさんろく以外でもさまざまな場所でお酒を飲むことができるようになった。そのためか、仕事帰りに一杯という風潮ではなくなってきた。昔は、「月曜日に気合いを入れるために飲み、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日と仕事を頑張り、土曜日にさんろく街で飲む、そして日曜日は家でゆっくり休む。そして月曜日・・・」というパターンが典型的であったという。今では、木曜日、金曜日が多く月曜日は少ない。近年では仕事帰りに自宅近くの近所の居酒屋や、一度帰宅してから飲みに行くパターンが増えたため、住宅街の多い東光・豊岡・永山などを中心に地域の居酒屋が増えた。また、そういった傾向は働き盛りの30代~40代のサラリーマンに多く、08年の不景気の影響などにより財布の紐がより固くなってきているようである。その年代の人々はちょうど教育費など出費が多い時期でもあり、なかなか自分のためにお金を使うという状況でもないのは確かである。単に「家族との時間を大切にしたい」という気持ちももちろんある。逆に50代以上は子供たちが自立し、お金にも余裕がある。そして、一番栄えていたころのさんろくを知っているため「さんろくを活気づけたい」という奉仕的な気持ちもあり、今でも通い詰めている。また、そういう人々はたいていどこかの店の常連客になっているので、リピート率は高い。いわゆる「さんろくを社交場接待を理由によく通った。」年代である。

さんろく全体の傾向としては、安いといっても地域の居酒屋と比較すると割高感はある、また高級店も存在するため毎日通うということはそれなりに収入がなければ難しいのかもしれない。しかし、最近では飲み方が変わり、安い酒を短時間で大量に飲むようになったといわれ、そのためか泥酔しやすく、すぐ帰宅できる立地が求められているようである。一方、少し前までは熱燗をちびちびと引っ掛ける程度が主流で、普通の飲み方をしていれば帰れるほろ酔いだった。経済状況の変化とともに、酒の消費方法も変化していった。

また、月別来客にもいくつかパターンがあり、1月・12月の新年・忘年会、10月の寒風会、3月・4月の歓送迎会シーズンが客入りが増えるといわれる。しかし、グラフからもわかるように、忘年会を12月だけに行い新年会を行わないパターンが近年多いため1月は消費量が少なくなり、3月・4月の歓送迎会シーズンは毎年飲み会が多く、夏期は暑いため冷たいビールを飲み遊びに来る客も多い。10月の寒風会を行っている企業は少なくなっており、秋季はビールの消費低下と同時にさんろく街の客足が遠のきがちである。

更にさんろくには、「繁華街」というイメージが強く大人の場所であり、あえて家族連れで来る飲食街ではないため家族連れの姿も少ない。

【表 3-1 07 年度 月別ビール課税移出量】



※グラフは全国版【データ引用：ビール酒造組合HP】

3-1-1 労働者

さんろく街で働く人々はいわゆる「夜の蝶」と言われるホステスさんが多数を占め、そのほかにも板前、シェフなど調理を主とする人々や客引きなどのメンズがいる。その他にも、酒屋や商店、氷屋などのさんろくを支える店の人々などがあげられる。

特にホステス・キャバ嬢と呼ばれる女の子たちは若い子ばかりで希望者も多くれば逆に離職率も高い。夜のお仕事は、他のバイトや仕事をするより割高で人気の職種とも言える。

9 番目店主・今野氏は、「賃金をもらっているのだから、その分働け」と強く訴えてきた。今野氏は、「昔のキャバレーでは、朝新聞を読み、コミュニケーションのツールを得ていた。しかし、現在では単にカラオケを客に歌わせたり、酒を進めるだけになっている。客にも喜怒哀楽があり、毎回歌いたい訳ではない。最近では客の『気持ち』を無視した接客ばかり、客が悲しい時にカラオケで歌って騒げるわけではない。人と話してストレスを発散するためにさんろくに遊びに来ている。今の接客は話中心ではなく、カラオケなどに移り頭の使わない接客になり知的レベルが低下している。勤める人の意識も、賃金が高いからやっているという安直なものが許せない。昔のママさんたちはキャバレーなどで修業をして一人前になってから店を開いていたのだが、今は売上重視で金を積んでオープンさせた素人ばかり」と怒っていた。また、組合の松本氏も「最近の女の子は接客をするのではなく、ただの綺麗なお人形になっている」という。同時に「近年の傾向では『社員教育』『接客指導』が行き届いておらず、昔のバブル期に比べると接客の『質』が落ちた」という客の声も少なくない。

また、出勤前のホステスさんの髪を結って盛ってと時代に合わせた夜の蝶の華やかなヘアセットを担う美容師さんや、飲み疲れて帰路に着くお客さんや仕事終わりのホステスさんを送るタクシードライバーもいる。タクシー会社は、利用客が減る中、タクシーの数は増える一方で、利用客の獲得競争が激しいものとなっている。昼間と違い夜のさんろくのお客はほとんど酔客なためからまれることも多く、彼らを上手く扱うテクニックもドラ

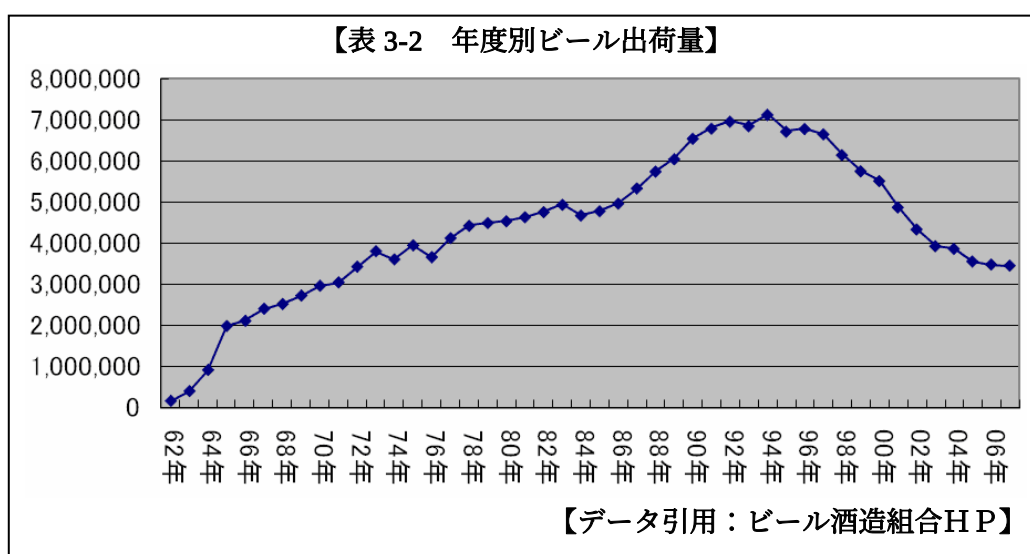
イバーには必要である。また、旭川ハイヤー協会は、ドリンクラリーなどのイベント時にタクシー代を低料金で使ってもらい盛り上げに貢献している。

3-1-2 その他

旭川は、最盛期に十九の酒蔵を抱えていた「酒のまち」である。大雪の麓の水は酒造りに最適である。以前は、ホテルや料亭の宴会場の^{どんちよう}緞帳には、酒蔵名入りコップ・おちょこが使用され、それらは酒造側が得意先に提供しており、酒蔵と飲食店は「共存共栄」を図ってきた。さんろく創世期の 50~60 年代の飲む酒といえば「日本酒」だったのが、庶民の飲む酒はウィスキーやビールに変化した。そして今では低価格の焼酎や発泡酒が主に消費されるようになった。旭川市と周辺 8 町の酒類消費状況（03 年度）によると、「清酒」は、前年比 3,9%減の 2,633 ^{キロリットル}で、4 年連続で前年度を下回り、90 年代中盤以降日本では発泡酒が親しまれるようになった。

03 年の酒税法改正前までは、同法の規定で発泡酒はビールよりも税率が低く抑えられたため売れ行きを伸ばしてきていたが、改正によって発泡酒の税率が引き上げられた。消費者が離れる事を懸念した各ビールメーカーは、より低税率（低価格）になるよう麦芽以外の原料を使用して作った、もしくはビールや発泡酒に別のアルコール飲料を混ぜて作った、ビールや発泡酒と同じような味わいのアルコール飲料の研究・開発に着手、第 3 のビールが誕生し低価格・低アルコール志向になってきた。

下記のグラフは日本全国のビール出荷量であるが、北海道も同じような出荷状況となっており、バブル期に一気に出荷量が増加しバブル崩壊後に減少、さらに 00 年度から発泡酒などの出荷に押されて減少傾向にある。



スナックやバーは洋酒ブームで成長を遂げ、発展してきた。また、旭川は「カクテルの街」としても有名にも関わらず、消費は低価格の酒が中心になってきている。これは、さんろくだけではなく日本全国同じ状況である。

学生の飲み会では安い飲み放題コースを選択することが多く、チューハイやソフトドリンクなどの消費が多く、日本酒を好む人は稀で飲む人自体も減少した。

日本酒消費が減少し、地元酒蔵破綻の厳しさが明らかになったのは、04年6月の「高砂酒造」の民事再生法適用申請である。再建に踏み出した高砂酒造の小桧山氏は、「さんろく街のような地元の飲食店は大事な存在。生産量のある程度確保するためにも、地元で消費することが必要」という。また、酒造メーカー勤務の兄も同様のことを述べ、現在ではさんろくでの消費のほかに海外から訪れる観光客への販売や海外への輸出入など以前とは違う市場へ拡大も進んでいるという。しかし、08年度から生じた円高の影響などで先が見えないという声も強い。

さらに、長引く不況で、最近では酒の在庫を置かない店が多い。そのため、注文を受けるとさんろくの酒屋・商店から自転車で商品を届ける姿がある。「景気のいいときは少ない注文は断っていたが、今はそんなことは言ってもらえない」と酒屋店主が言うように、繁華街の一番の売りの「酒」にも経済的な影響が強く出ている。

3-2 観光客

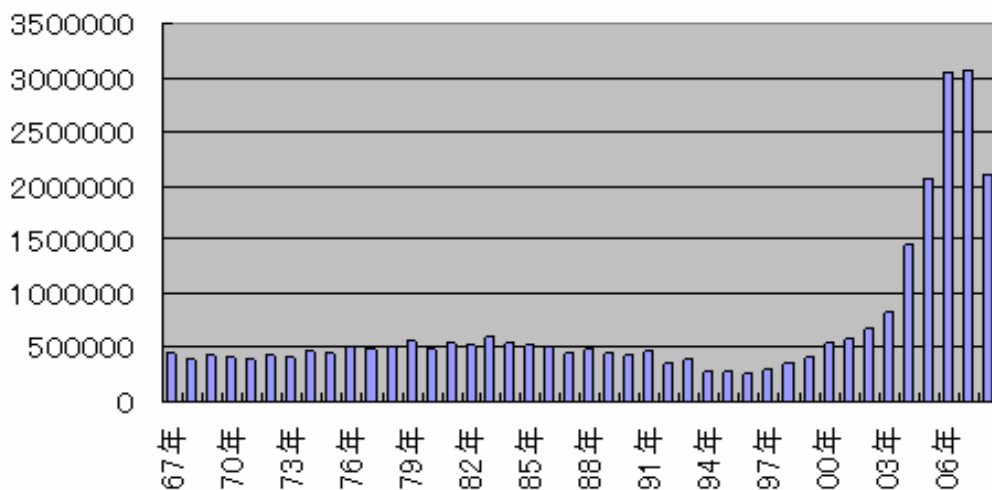
近年さんろくでは、旭川市民のさんろく離れが顕著である。そんな中以前からの北海道観光ブームや、旭山動物園効果で旭川を訪れる観光客がさんろくに立ち寄ることがしばしばある。

3-2-1 日本人観光客

旭山動物園の人気に伴い、旭川をはじめ北海道をおとづれる観光客が激増した。97年以降は入園者数が少しずつ増加し始め、翌年以降も「もうじゅう館」「さる山」などと毎年人気の新施設をオープンさせそのたびに入園者を増やし続けていった。04年6月の「あざらし館」公開以降の7月は18万5461人、8月は32万1500人と、恩賜上野動物園を抜いて日本一の月間入園者数を記録した。以降、毎年夏シーズンは上野動物園を上回るほど、北の動物園は賑わっており、旭川に観光客を呼び寄せる要因となっている。年間入場者数は、05年度には前年比の55万人増の206万人、06年度の入園者数は300万人を超え、350万人の来園者があった上野動物園に次いで国内2位、世界レベルでも上位の入場者数を誇る動物園になった。そのため、旭川の観光資源としてこれからも観光客数が増加することが見込まれる。

また、観光客数が年々を増加していることが前のグラフからわかるのだが、月別来客数を見てもそれがよくわかる。さらに、毎年同じような月別分布で観光している。やはり、8月に観光客が多いのは「夏休み」を利用し遊びに来ていることがわかる。更に、夏の時期と言えば「さんろくまつり」などのイベント時や夏のビールが恋しくなる時におとづれるので、さんろくにも少なくとも来客に対する影響があると伺える。

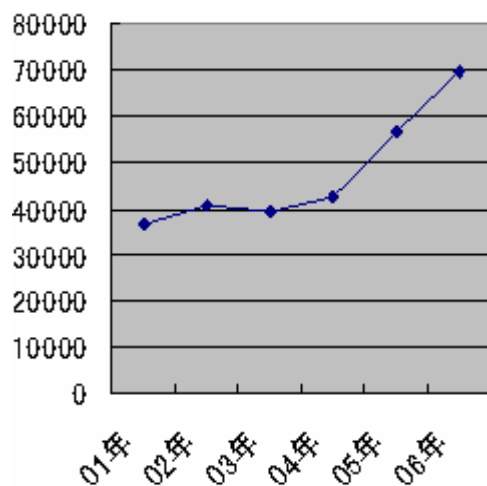
【表 3-3 旭山動物園来園者数推移】



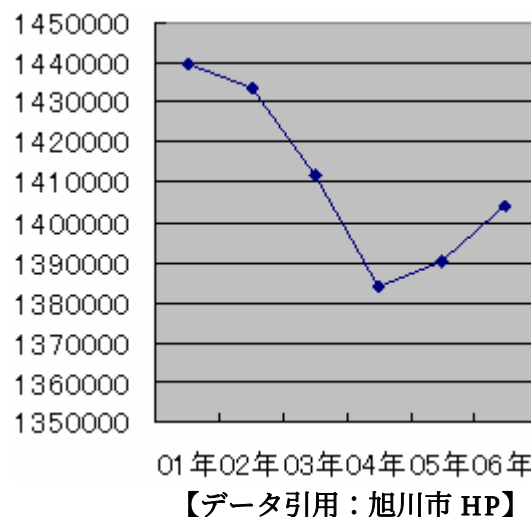
※08 年度は上期分のみ【データ引用：旭山動物園 HP】

更に、年度別に道内観光客数と旭川市に訪れる観光客数を比較すると、道内は 01~04 年まで減少し続けているが、旭川市は減少までとは言わず横ばいで変化している。さらに、道内・旭川のグラフに共通しているのは 04~07 年の伸びである。これは、旭山動物園の来客数が激増と同時期であり、北海道に訪れる＝旭山動物園に訪れる＝旭川に訪れるということが言える。以上の点から、人を「旭川に呼ぶ」ということに関してはよい方向にむかっているものの、その人をどうやってさんろく街に呼び込むのが課題として浮き彫りとなった。さらに、道内観光客数内訳においては、小樽・札幌を中心とした道央圏への観光客が多く、それについて旭川のある道北圏は旭山動物園ブームにあやかり近年観光客数を伸ばしている、07 年度に道北に訪れた観光客数が 237388 名、旭川を訪れたのが 69771 名と約 29%が旭川に訪れていた。逆に、いままで、函館を中心とした道南圏・知床を中心とした釧路・根室圏は観光客数を年々徐々に減少させている。これらの地域は、ドラマ「新撰組」での五稜郭人気による函館観光の人気上昇や知床の世界遺産登録による話題性など、一種の「ブーム」により観光客数の増減が生じていることが伺える。これらの事例から、旭川の旭山動物園も一時的な「ブーム」にならないように、さんろく街をはじめ市全体で観光客への誘致活動を続けなければならない。

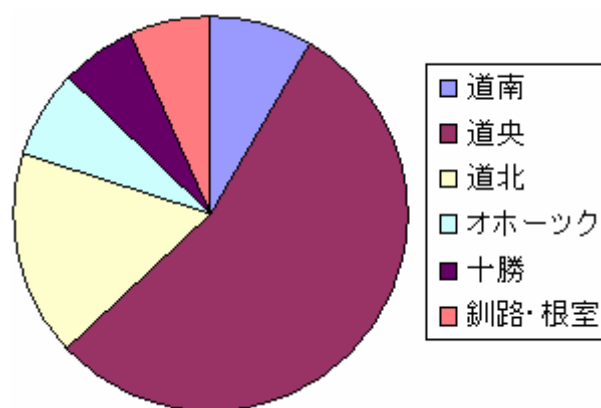
【表 3-4 年度別旭川市観光客数推移】



【表 3-5 年度別道内観光客数推移】

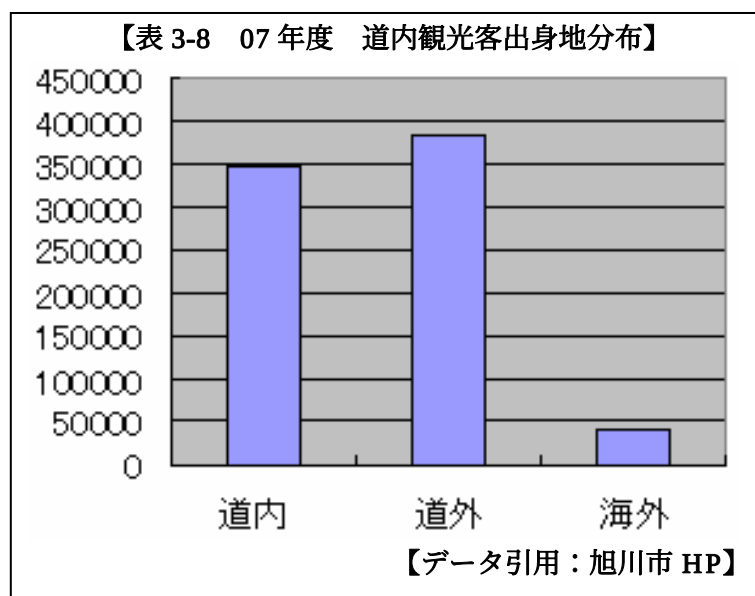
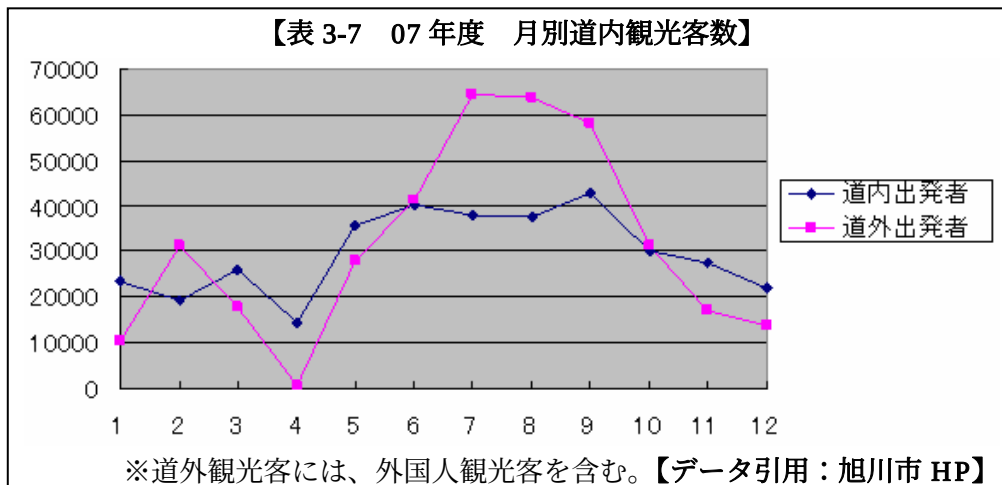


【表 3-6 06 年度 道内観光客数地区別内訳】



【データ引用：旭川市 HP】

そして、道内観光客数と道外観光客数については、夏休みを利用し避暑として訪れる道外観光客が目立つ、さらに一月に道外観光客は道内ではなく海外に出かけることが多いため減少し、4 月など入学入社転勤などで忙しいため少ないと考えられる。逆に、日本人は冬型観光で雪を見たいという考えはなく、冬こそ暖かいところへということで、沖縄・ハワイなどの南国への観光が 11・12 月ごろ増加する。そのため、11・12 月の道外観光客が少ないと考えられる。さらに、一年間を通して道内・道外観光客総数では大差がないものの、大多数を占める大切なお客様である。

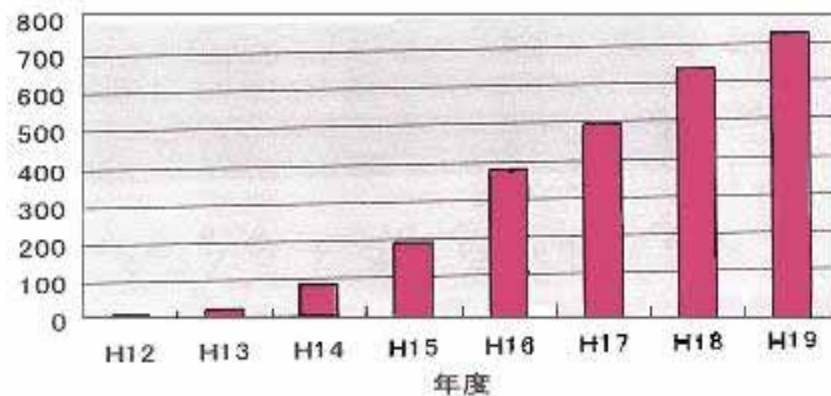


3-2-2-2 外国人観光客

近年旭川市では、観光客誘致活動が盛んであり、特に海外向けの PR に力がはいつている。実際に 08 年に中国に市長自身が出向き、「中国教育旅行等誘致プロモーション（上海からの教育旅行の誘致等）・台湾観光プロモーション」として旭川を宣伝した。もちろん、旭山動物園だけではなく、ユーカラ織や地酒、家具など旭川市全体を PR し観光旅行だけではなく、修学旅行などの誘致にも力をいれている。

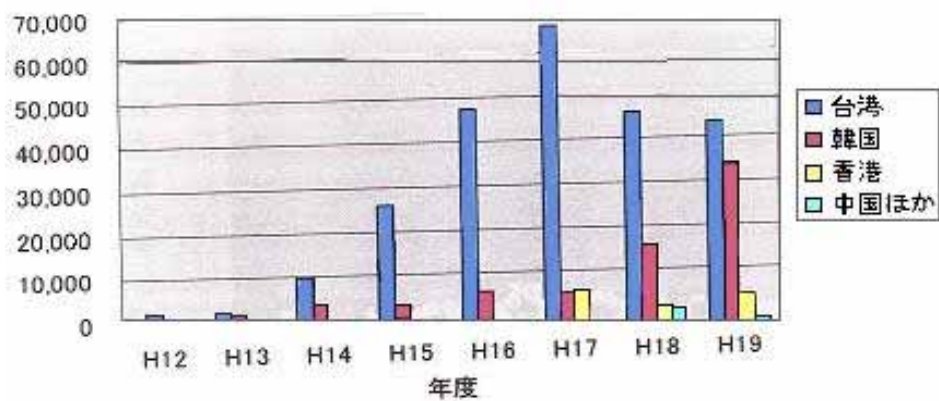
この成果は、外国人観光客数の増加や旭川空港における国際定期便・国際チャーター便数の増加に現われている。さらに、旭川を訪れる外国人の数はもちろん、観光客出身地別に見ても、台湾・韓国などの近隣の国々からの観光客が増えていることがわかる。

【表 3-10 旭川空港における国際定期便・国際チャーター便の推移】



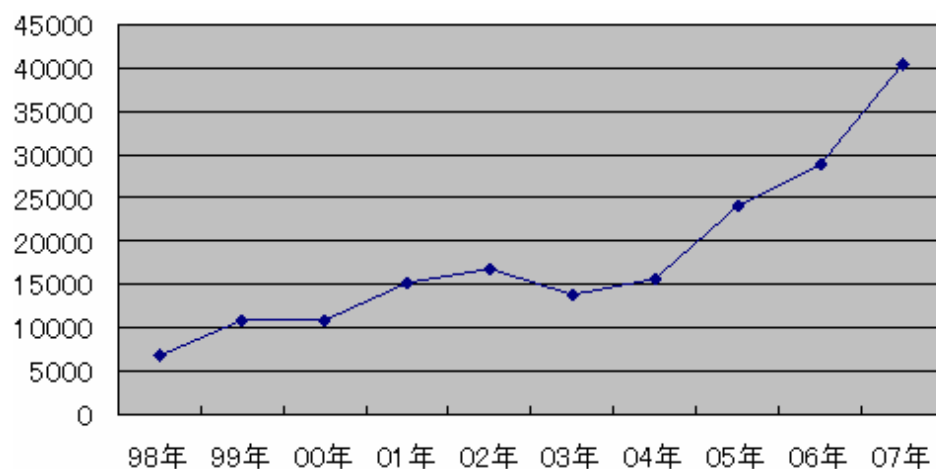
【引用：旭川市における観光振興の取り組みと課題・方向性 浅利 豪氏】

【表 3-11 旭川空港における外国人乗降客数】



【引用：旭川市における観光振興の取り組みと課題・方向性 浅利 豪氏】

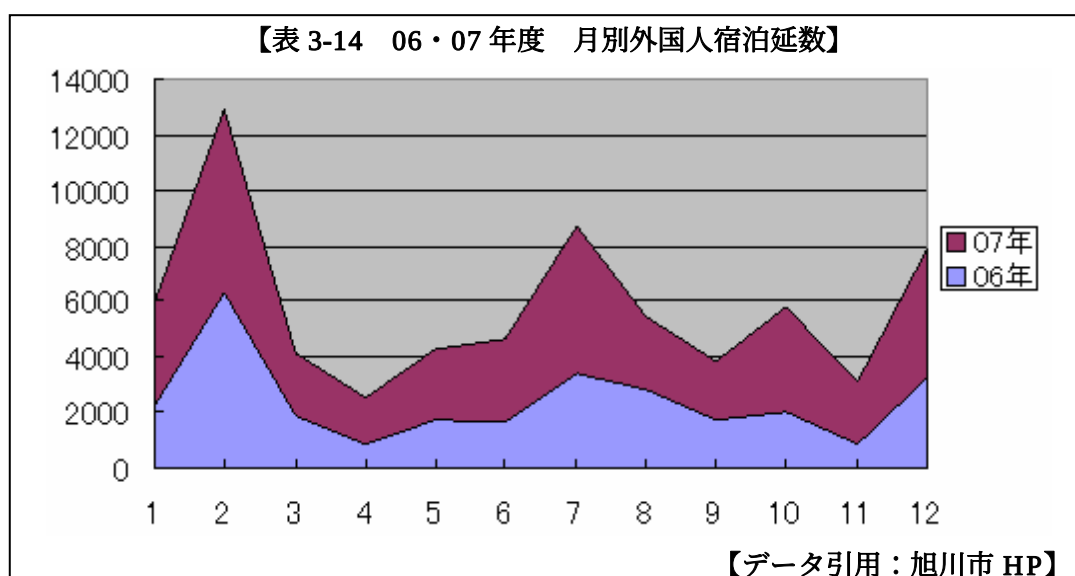
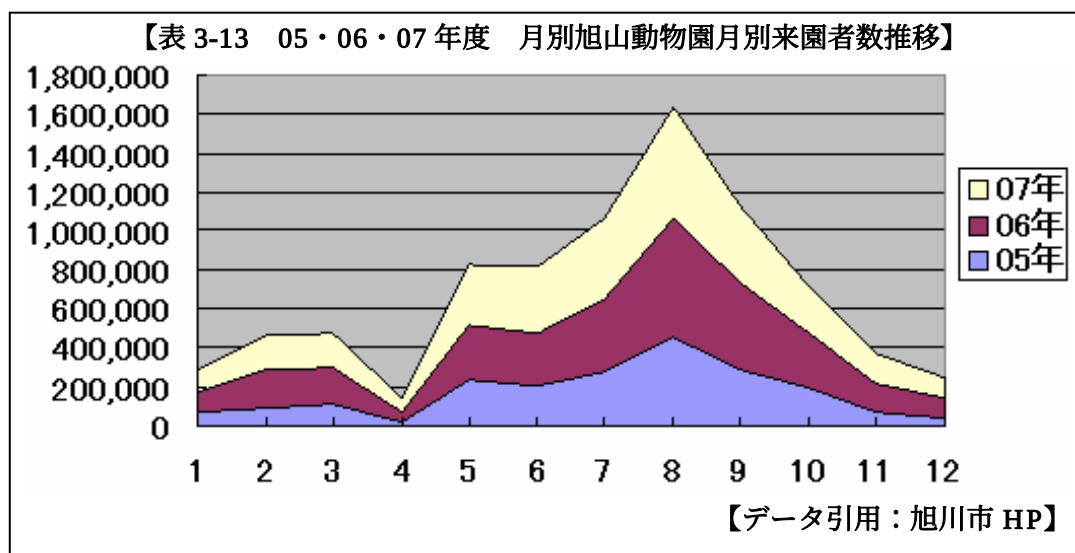
【表 3-12 年度別 外国人観光客宿泊延数】

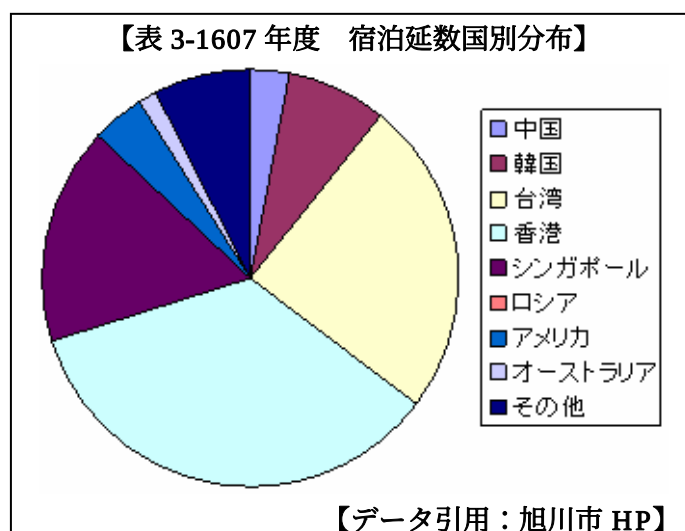
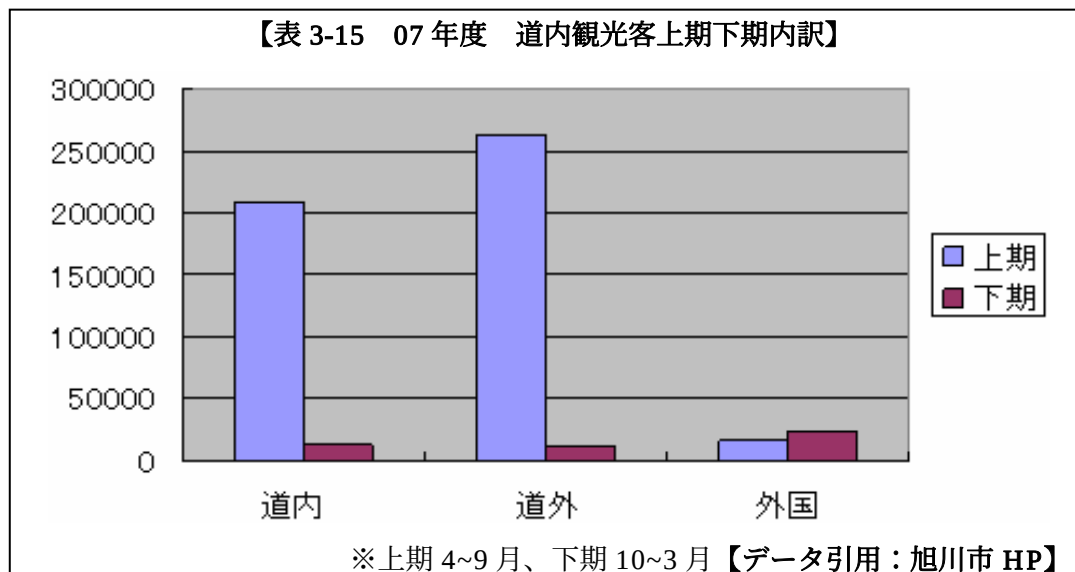


【データ引用：旭川市 HP】

更に、月別外国人観光客数、上期・下期比較を見ると、母体数の差が大きいものの訪れる季節に違いがあることがわかる。先にも述べたように「夏休み」を利用し遊びに来る「夏型」観光ではなく、外国人観光客は「冬型」観光の傾向が強いことがわかる。さらに、2月に観光客数が増えるのは、旧正月（一月の下旬から二月中旬まで）を家族で楽しむ傾向のある中国文化圏の人々が外国人観光客の大多数を占めているため多いと考えられる。

また、単純に香港・台湾・シンガポールの観光客数は雪や寒さを体験するために、冬型観光を選択するが多い。また、その頃の旭川では、「冬まつり」などの北国ならではのイベントがあり外国人観光客を呼びやすく、札幌でも同様な「雪まつり」が行なわれているのだが、旭山動物園も同時見学というツアーが多いため札幌圏ではなく、旭川などの道北圏にツアーのポイントを置く外国の旅行会社もすくなくない。これも、PR の成果であると言える。





3-2-3 観光客を招き入れることによる弊害

まず、観光客は一過性なためリピーターとしての期待が持てない。そのため、一回限りの来店になることが多くさんろくの発展につながるような動きは起きないと予測できる。

道内・道外観光客数においても、外国人観光客数と比較すると数が多くそういった人々をいかに旭川に、さんろくに呼び込むかが課題となる。「旭山動物園」ひとつに頼らずほかのなにかを模索する必要がある。そして、さらなる観光客誘致を続け外国人観光客をより増やしていくことでさんろくにも何か変化がみられるのではないかと考える。

しかし、家族旅行でさんろくを訪れる場合は、地元住民とは逆に小さな子どもも同伴で飲食店で食事をするので、いつかその子が大きくなったときに、再び訪れたいと思う、まちづくり、繁華街づくり大切である。

4 まとめ

4-1 なぜさんろくが衰退したか

調査をづつつけていくうちに、さんろく街には「栄枯盛衰」という言葉がぴったりあてはまると思った。景気のよいときは良く、悪いときは悪いと明確に経済状況が反映される。この傾向は、さんろくだけではなく「盛り場」と言われているところではどこでもあてはまるとされる。また「時代変化」と言うものが密接であることが言える。それ以外にも、給料減少傾向から繋がり食費など減らせるところでムダ使いをしない「節約生活」や、盛り場以外でも酒を楽しむ場所が増えたこと、住宅街への飲食街の出店が増えたこと、加えて住宅事情の変化など様々な要因がさんろくから人を遠のけたといえる。

高度経済成長とともにさんろく街が形成され、バブル崩壊と同時に衰退するなど、経済状況もはっきり反映させている。「歓楽街」自体「飲食店」や「映画館」などのレジャー施設が多数集まっている所とされ、「娯楽」としての意味合いが強く、娯楽と言えば生活に余裕がなければ手を回さず、逆に余裕があると派手に遊ぶことになる。「余裕」と言っても、金銭的な意味合いだけではなく体力的、時間的、精神的な余裕も含まれると考える。仕事終わりに疲労困憊で遊ぶのか、仕事が忙しく時間がないのに飲みに行くのかなど仕事中心の現代人がなかなか遊びづらい世の中になってきていることも、客足が遠のいている原因ではないかと考える。

そのほかにも、「09年の3月に200軒の店がさんろく街からなくなる。」という、噂話など、そういった話がさんろく自体にマイナスイメージを植え付け、「廃れた歓楽街」といことで、遊ぶところという認識ではなくなっているのも問題である。さらに、さんろく街を支えている、食料品や酒なども原材料費の高騰などにより価格が上昇し、それがメニューへの影響となりますますます飲食のインドア化に拍車をかけていると想像できる。

また、自家用車の所有率が高くなったことにより駐車場の少ない市街地ではなく、駐車場のある店に人が流れていった事実もある。さらに、そういった傾向がタクシーから客足を減らしていくなどの悪循環を産み出してしまった。お酒を飲んだ場合はもちろん運転はできないので代行者などを利用する。自家用車があることで自宅の人が迎えに来てくれれば出費が抑えられるのだが、それでは経済が回らない。

個人的には「すすきの」という関東以北最大の歓楽街の存在も大きいと考える。「すすきの」は、「さんろく」よりも店舗数も従業員数も多く、それに見合う客数も訪れる。さらに、「すすきの」で遊んだあとに「さんろく」で遊ぶと、同じ「歓楽街」とは思えないほどの規模の差があり、近くて遠い同じ北海道の歓楽街がさんろくの脆弱性を露呈していると思う。それ以外にも多くの問題が見え隠れしているのかもしれない。

4-2 今後のさんろく像

さんろくが全盛期の盛り上がりを取り戻すことは、困難を要すると考える。だが、少しずつ活気づけることはできるだろう。これからは、旭川市や商工会議所、組合などとの「協力」・「協賛」していくことも、一種の復活への手立てと考える。ひとつひとつの店がどん

なに企業努力をしてみても衰退を食い止めることは難しいのではないかと推測でき、逆に一軒一軒の個人プレーでは客の取り合いにない共倒れになってしまうことが目に見える。そういった最悪の事態を防ぐためにも、「組合」などの仕切りによるグループ活動が重要になっていくと考える。さらに、外国人観光客が多くおとずれる中、一回限りの遊び場で終わらないように企業努力はおのおの積極的に続けていくべきである。さらに、今の時代は、「黙っていたら客は来ない」ということを露呈した。お客を楽しませるための歓楽街ということ忘れてはならない。いまは、バブル全盛期の好条件や景気の良さが味方しているわけではない。客を呼ぶためには店側の努力が必須である。

さらに、消費者ももっとさんろくで遊ぶべきである！！無料の情報誌などを利用しより格安に楽しむなど、消費者もより賢くさんろくにくるべきある。

【参考文献】

- ・五十嵐広三,1970,『市民運動の証言―ドキュメント旭川―』鶴書房刊
- ・五十嵐広三,1974,『北斗七星』五十嵐広三の本を出版する会
- ・加藤政洋,2002,『大阪のスラムと盛り場―近代都市と場所の系譜学』創元社
- ・宮内泰介研究室編,2007,『聞き書き 北上河口地域の人と暮らし―宮城県石巻市北上町に生きる』北海道大学大学院文学研究科
- ・北海道新聞社旭川支社報道部,2006,『旭川さんろく物語』北海道新聞社
- ・農山漁村文化協会,2006,『大雪山のふもとから ある山村の四季と暮らし』白滝地区林産協同組合
- ・加藤政洋,2005,『花街 異空間の都市史』朝日新聞社

【参考ホームページ】

- ・ウィキペディア：
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8>
- ・北海道の映画館：<http://jbbs.livedoor.jp/bbs/read.cgi/movie/2821/1054475854/-100>
- ・タウン検索：<http://www.ecafe.jp/clnagayama/exec/app/stores.asp?cat=2>
- ・旭川市 HP：<http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/index.htm>
- ・北海道駅前観光案内所旭川：<http://www.onitoge.org/tetsu/hakodate/97asahikawa.htm>
- ・街の噂（巷談）～北海道編：<http://homepage2.nifty.com/earima/urafuu.htm>
- ・全国津々浦々遊里リスト：
http://www.shurakumachinami.natsu.gs/04rensai-page/yuriwoaruku/yukaku_list.htm
- ・旭川商工会議所 HP：<http://www.ccia.or.jp/>
- ・キョクイチ HP：http://www.kk-kyokuichi.co.jp/01_contents.html
- ・さんろくまつり HP：<http://www.36fes.com/index.html>